# 夏、僕ら、青春。

あきよう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏、僕ら、青春。

【Ｎコード】
Ｎ９８６６Ｑ

【作者名】
あきよう

【あらすじ】
二年生になって高校生活に慣れてきた主人公秋陽直樹はいつも一緒のメンバー化学好きの斉藤彩都、運動が得意の十文字和弥、リーダーの山崎陸と過ごしている。
二年生の教室にも慣れてきた梅雨も終わった６月の後半、いつものようにみんなで食事をとっているとリーダーの陸がいつものように唐突に俺達に向かって言う「野球やろうぜ」と。
その一言から全ては始まった……。野球を題材にした爽やかな青春ストーリー。

# 01話　日常

ドゴォォォォン

どこかで爆発が起きたような大きな音が響き渡る。

またいつものことか……も少し寝かせてくれよ……。

そう俺……秋陽直樹はそんな軽い考えでいた。

またいつものように朝みんなが騒いでいるのだろうと考えていた。

まあ、朝騒いでいるとしても爆発が起こったような音がするのはおかしいのだが……。

ドオォォォン

もう一度起きた爆発音で浅いまどろみの中にいた俺は無理やり目を覚まされる。

「たっく何なんだよ……」

こんな爆発音を出せる学生を俺はこの学校で友人しか知らないが、どうしても悪態をついてしまう。

あたりはまだ暗く生徒はまだ寝静まっているはずの時間だ。

普通は学生でこんな音が出せるやつはいないはずだが、さっきも言ったとおり俺はこんな音を出せる人間を、数人知っている。

俺はゆっくりと他のルームメイトが寝ているはずのベッドを見る。

俺は頭の中で最悪の結果を予想する。こうしていればそれが現実になったとき俺の精神に対する負担が少ないからだ。

俺が他のベッドを見ると、最悪の予想どおり三つのベッドには人はいなかった。

「なんで人間最悪の予想が当たることのほうが多いんだよ……」

先に予想していたとはいえ、無意識にそんな悪態が口から出てしまう。

そんな日々を少し楽しんでいる俺も変なのか？　深い溜息を一ついてから俺は急いで着替え部屋を出る。

こんなこともよくあることなので、俺はもう早着替えも慣れている。
その音がしている場所に向かう途中でも何か物が破壊されている音は止まらない。
ドゴォォォォン　バアァァァン
この音だけを聞いていると自分は奮戦地帯に放り込まれたのではないのかと思うぐらいだ。
俺が行ってもできることは少ししかないのだが、友人としてこれを止めに行く義務がある。
俺の予想どおりその音は、食堂で二人の男が出していた。
右側にいる黒い腕輪をしている筋肉質の大男。こっちの名前は十文字和弥だ。
さっきから素手で机や椅子をたたき壊しまくっている。
毎回見るたびに思うのだが、あれは誰が修理代を出しているのだろう……。
そして、左側で攻撃をずっと紙一重で交わしている白衣の男は、斉藤彩都。
彩都は本来、運動神経はないと言っても間違いがないのだが、今の彩都は普段からは想像のつかないほど素早く動いて和弥の攻撃を躱している。
二人の周りには他の生徒が多く集まっている。
こんな夜遅くなのにみんなはどこで情報を手に入れたんだ？
そんなことを思っていると、しなくてもいいものを自分の感想を述べている生徒がいた。
「さすが十文字だな……。部活に入ってない中で机を素手でたたき割れるのはあいつぐらいしかいないな……」
さすがに部活に入っていても、素手で机を割る人間はいないだろう……。
そして今度は彩都が、白衣の内側から試験管を取り出して投げる。
ドゴォォォォン

その試験管が地面に触れると同時に、爆発が起こる。
さっきしていた爆発音はこれか……。
「やはり斉藤もすごいな……。最初に注射を打ったあとは素早くなるし、試験管は爆発するし、「歩く科学」は伊達じゃないな……」
小学校の頃からずっと一緒だが、思わず俺も感心してしまう。やっぱりすごいなふたりとも……。
って感心している場合じゃない。
俺は二人の喧嘩を止めるために、間に入る。
「「直樹！？」」
二人は驚いたように、お互いの攻撃をずらす。
和弥の拳は俺の右側を通り、彩都の試験管は俺の左側を通り抜けて言った。
俺の後ろで爆発音と悲鳴が聞こえてくる。
「どんな理由で喧嘩してるんだよ」
俺は一番疑問に思っていることを聞く。
「理由？そんなもんねぇよ。戦いたいから戦う。それだけだ」
「……僕にも理由はない。……売られた喧嘩を買った。……それだけだ」
和弥、彩都の順に理由を話してくる。和弥はすでに理由でもないが……。
「危ないぞ。どいてろ」
そう言って和弥は俺をどかす。
和弥に押されて俺はまわりの野次馬の中に飲み込まれてしまう。
二人はまたすさまじい音を立てて喧嘩を始めてしまっている。
野次馬がさっきよりもヒートアップしているせいで、俺はもう二人のもとにたどり着くことすら出来ない。
少し癪だが、ここはあいつに頼るしかないか……。
俺があたりを見回してそいつを探してみると、そいつは今まさに食堂から出ようとしていた。
薄情な奴め……。

友人の喧嘩をそのままにして、部屋に帰って行こうとするそいつを俺は止める。
「陸、何で帰ろうとしているんだよ。俺じゃ止めれないんだからせめて喧嘩を止めてから帰ってくれよ……」
「何言ってるんだ直樹。面白いからいいじゃないか。それにあいつら同士なら死にゃしないさ」
こいつの名前は山崎陸。俺の幼なじみだ。面白いことが好きで少し危険であってもこういうことならすぐには止めないやつだ。
今さらっとすごいことを行ったが本当のことなので、野暮なツッコミはしないでおこう。
「怪我人が出てからじゃ遅いだろ」
「まあ、たしかに怪我人は出したくないしルールは必要だな……」
そう言って陸は野次馬をかき分けてラクラクと和弥と彩都の居るところに行く。
「二人とも、止まってくれ」
陸のその一言でふたりとも動きを止める。二人とも陸に反対しても、どんなことでも勝てないことをよく解っているからだ。
「どうせ今回も理由はないんだろうから理由は聞かないが、このままだと戦いに不公平が出るからルールをつくろう」
「何でそんなものが必要なんだよ？」
和弥がそう聞くが、たしかに怪我人を減らすことがそれとどうつながるのか俺にもよく解らない。
「お前は素手で戦うが、彩都は化学で戦うだろ？　それだったら戦っている途中にも新しいものを作ることもできるから不公平だろ？
だからルールを作るんだ」
「……ルール？……それはどんなルールなんだ？」
さっきまで殆ど黙っていた彩都も陸に対して疑問を口にする。
「お前たちの喧嘩はもうすでに学園中の見世物となっているだろ。それを配慮してまわりの野次馬に気を使うんだよ」
「そんな事する必要ねぇだろ。怪我なんか承知でやってきてるだろ

野次馬共は」
彩都も返事はしないが、無言で和弥に肯定する。
「たしかにそれは確かだがお前たちはそんな事で停学や退学になりたくないだろ？」
その言葉を聞いて和弥も彩都も言葉をつまらせてしまう。
それなら喧嘩のルールを作るんじゃなくて、喧嘩をしないルールを作ればいいのにな……。
「まず、其の壱武器は自分の手持ちからなら何でも良し。其の弐手持ち以外のものを武器に使わない。其の参どちらかが足と手以外を地面に着けたら終了だ。わかったな！」
其の雰囲気に飲み込まれ、和弥も彩都も頷きを返してしまう。
ただ喧嘩をするなと言われたわけではないので、二人とももう一度お互いに向き直る。
「レディー・ファイト！」
その声を掛け声にもう一度喧嘩が始まる。
喧嘩が始まった瞬間動いたのは意外にも彩都だ。試験管を懐から取り出すと和弥の手前に投げつけ、爆発を目眩ましのように使っている。
確かに爆発自体はさっきの爆発よりも小さく、あくまで目眩まし用らしい。
だがその爆発の威力は机や椅子などを吹き飛ばすほどはあるらしい。
その短時間の隙を使い彩都は注射を自分に打つ。
さっきの薬の効果は切れているのか、動きはいつもの彩都だ。
動きは早くなっていないため、多分攻撃強化か防御強化の注射だ。
見るたびに思うのだがあの薬はどうやって作っているのだろう。
いろいろな薬品を白衣の中に入れて持ち歩いているし、法律とかには引っかからないのだろうか。
彩都が和弥にめがけて突きを入れる。
和弥は珍しくそれを避けるが今回はそれは正解だったのだろう。

彩都の突きは後ろにあった椅子に当たる。
その突きで椅子は壊れるにはしないが、思いっきりその椅子は吹っ飛んでいく。
野次馬の中に飛んではいくものの野次馬もそれに当たるほど馬鹿ではない人間がここには見に来ている。
それもこれまで怪我人がいない理由の一つだ。
あの注射は攻撃強化か……。
このルールは一見公平になっていると思えるかもしれないが、これは明らかに携帯している武器の数で彩都が圧倒している。
「これは和弥のほうが不利じゃないのか？　陸は確か和弥が不利だからルールを作るって言ったよな？」
「まあ黙って見てろ。ルールってのはどこで牙を向くか分からないぜ？」
意味深に笑う陸を横目にもう一度俺は二人の状況を見る。
相変わらず彩都が圧倒している。
そう思っていると、状況は明らかに公平になっていた。
彩都は柱の裏などに隠れ攻撃を確実に当てるようになったに対し、そのおかげで攻撃数が少なくなっているので和弥は積極的に前に出て攻撃をしている。
「注射が攻撃、防御、高速の三つをそれぞれ一セット。試験管爆弾が二十個」
陸がいきなりよく分からないことを言う。
彩都のことを言っているのはなんとなく分かるが、それが何を指しているのかはさっぱりわからない。
「なんの話だ？陸」
「彩都の武器数さ。彩都は化学を使って自分自身の弱さをカバーしている。だがその数は無限じゃない。それにそもそも、もっと威力のある武器は喧嘩を擦る前に彩都は組み立てていないから、このルールは長期戦になればなるほど彩都のほうが不利なのさ」
薬の効果も無限じゃないしな。陸はそういう。

たしかにこのルールは公平になるルールだ。だが本当に公平なのは不利と有利がどっちにもあるって意味じゃなかったよな……。
「うおらぁぁぁぁ」
和弥は渾身のパンチを彩都に向かって出す。
彩都も持っている試験管を投げつけ至近距離でどちらも巻き込む爆発が起こる
どちらも後ろに飛ばされ、彩都は膝を和弥は背中をついてしまう。引き分け。
これでこの喧嘩は終了だ。
カンカンカンカン
どこから用意したのか陸がプロレスなどで使われるような試合終了を告げる鐘を鳴らす。
「そこで終了だ。結果は引き分けだ。お前らも早く寝ろよ」
そう言ってあくびをして陸は部屋に戻って行く。
時計を見ると時間は午前二時半を指している。
「……僕も帰らさせてもらう」
彩都も興味を失ったかのように白衣を翻して戻って行く。
どうでもいいが彩都は寝る時も白衣を着ているのだろうか……。
彩都が帰るのと同時に周りにいた野次馬も自分たちの部屋に帰っていく。
一瞬頭を打ったようでまだのびている和弥を起こそうかと思ったが、起こしたら起こしたで面倒なため置いていくことにする。
すまん和弥。
野次馬の大半は二人が嫌い合ったりして喧嘩をしているように見えるだろう。
俺にもたまに二人は嫌い合っているのではないかと思うほどだ。
だがあの二人は不良に絡まれたりしても絶対に手は出さない。
それは自分が自分で思っているよりも普通ではない、ということを自覚しているからだ。
そういう意味でも二人は本来はお互いを認め合っているのだろう

……。

こんなことさえ普通に接することができるようになった。

こんな非日常の光景が、俺達の中では日常の光景になっていた。

## 02話　野球

今日は少し寝坊してしまい食堂に入るのがいつもより遅れる。
というより昨日あれほど暴れていたみんなが俺よりも来るのが早いということには疑問を感じる。
俺は急いで朝御飯を持ってきて席に着く。
今日の朝御飯は、ご飯に味噌汁と玉子焼きというなんとも日本の朝食というようなご飯だった。
「悪い、遅れた」
「いや、べつにいいさ」
陸がそう答える。
昨日あれほど騒いでいたというのに、みんなの顔からは眠気や疲れが全然見られなかった。
「……直樹」
席に座った直後、名前を呼ばれる。
声をかけられて方向を見ると彩都が注射を俺に一本渡してきた。
この注射に入っている薬は精神を安定させる薬らしい。
病院に行けばもらえるというのに、彩都はこれを毎日作ってくれる。
だから俺はその関係で病院に行ったことはない。
なんで俺がこんな薬が必要かというとそれは……俺が二重人格者だからだ。
俺は昔、家では何かと扱いが酷かった。
もともと俺の親は俺が幼い頃に離婚し父親しかいなかった。
その父親は最低の人間だった。俺の母親がなんで離婚したかということがよくわかる。
暴力は振るわれるし、酷い事を言われるのもあたり前のことだっ

た。
その時から時々、記憶が飛ぶことがあったが俺はそのことを大して気にしていなかった。
そしてある時俺は誘拐された。
もちろん身代金が目的だったのだろう。
俺は家庭のこともあり、友人と呼べる人間は少なかった。その時は公園に一人でいたのだ。
そして俺の家は貧乏であった上、父親はそんなことに金を使うわけがない。むしろ自分で俺を殺さなくていいのだからありがたいと思っていたのかもしれない。
そんなこともありその事件は世間的には公表されなかった。
俺のそこでの生活は家とは変わらなかった。
そしてある時俺は……。ここからは俺の思い出したくない過去の記憶だ。
その時だ……俺が二重人格者だと知ったのは。
その生まれた人格が秋陽直弥(あきようなおや)だ。
直樹はそのような事件から生まれた人格のため命を玩具と同じようにしか見ていない危険な人格だ。
だから直弥が出てこないように、もしもの時のために俺はこの注射をしている。
この注射は彩都の特製らしく彩都以外には作れない上に医者からもらった薬よりよく効く。
俺が自分に注射を射っている時に陸が俺たち三人に話しかけてきた。
「なあ、野球をしないか？」
陸は唐突に俺達に聞いてきた。
「「……」」
あまりに唐突すぎて二人は言葉を失っているようだ。
やはりこのようなときは俺が聞くしか無いのか……。
それがこの中で俺が行き着いたポジションだ。

「陸が急になにかやりたいことを言うのには、もう慣れたけど……今度はなんで野球？」
こんなことに慣れても全く意味が無いんだけどな……。そんなことを思いながら俺は聞く。
「直樹は何を言ってるんだ？　高校といえば青春。青春といえば夏。夏と言えば野球だろ？」
陸は爽やかに笑いながら俺にそう答える。今の陸ならこの学園全員の女子を落とせるのだろう。そう思えるほど実に爽やかで清々しい。
「漫画かゲームの影響だな」
和弥は呆れたようにツッコミを入れる。
ふざけたような話だがこれは全部、本当の話だ。
漫画などを読んでこんなことをしてみたい、こんなことができたらいいなと思うのはよくあることだろう。
だが殆どの人がそれを実行にうつすことはないはずだ。
でも陸は本当にそのことをやってしまう。これまでにもバンドやボーリングなど色々なことをやってきた。
でもこれまでと今回ではひとつだけ例外がある。
これまでは俺達四人で楽しめたことをやってきた。でも今回の野球は九人でやるスポーツだ。俺達ではあと五人足りない。
「なあ、陸なんで今回は野球なんだ？」
和弥もそれを疑問に思ったのかそのことを聞く。
「何言ってるんだ和弥。さっき理由入っただろ？　俺達が青春真っ盛りで今が夏だからだ」
逆に何を行っているんだお前はとでも言いたそうな顔で言ってくる。
色々とツッコミを入れたいセリフだったが今聞くべきことはそのことではない。
このままではそのことを聞けないだろうな……。
そう思い今度は俺が聞くことにする。

「今までは四人で出来ることだったのになんで今回はわざわざ九人でやる野球なんだ？」
陸は一旦目線を外してからもう一度俺の方を向き、口を開く。
「俺は昨日ふと思ったんだ……」
「な、何をだよ」
陸の真剣な顔つきから和弥が身構えるようにして聞く。
「俺たち……友達少ないだろ」
シ――――――ン
俺達はその言葉を聞いたとたん石のように微動だと動かなくなった。
殆ど話に入ってこなかったはずの彩都でさえも固まっている。
どれほどの時間がたったかあまり解らないが、殆どの生徒がまだ残っていることから時間はそれほど経っていないのだろう。
彩都は何事もなかったかのように朝食を食べ始めているが、和弥にいたってはまだ固まっている。
「このままじゃいけないだろ？　青春まっただ中のはずの俺たちがなんで男だけの四人でつるんでいるんだ。俺達はなんだ？　ホモ野郎の集まりか？」
陸がよく解らないところで声を荒くする。
野球をやっても男子ばっかりだと思うんだけどな……。
まあ今はそんなことにツッコミをいれている暇はない。
陸の言うことは案外間違っていることではないと思う。
間違っていることを言ってないから俺達は毎回毎回、陸に着いて言ってるのだろう。
だが今回にいたっては、いつもとは違った。
「……僕には自分の目標がある」
そう一言告げて、彩都は一人で食堂を出ていってしまう。
「今回は俺も降りさせてもらうぜ。お前たちとなら解るが、知らない奴と力を合わせる意味が分からないからな」
和弥もそう言って食堂を出ていってしまった。

「おいふたりとも……」
もう少しちゃんと話を聞こうぜ。そう話を続けようとしたところで陸が止めてくる。
「いいんだ直樹。二人もいつかは、入ってくれるさ。今日の放課後はメンバー集めをするからな」
そう言い残して陸も一人で食堂を出ていってしまった。
ちなみに三人とも後片付けはしてない……。
俺は自分の分も含め四人分の後片付けをすることになった。

# 03話　再戦

その片付けも終わり俺は教室に向かう。
タッタッタッタッ
四人分の片付けをしていたせいで時間はもうすでにギリギリだ。
タッタッタッタッ
俺も教室は二階だがこのまま行けば間に合うだろう。
そんなことを考えながら階段を一段飛ばしで駆け上がる。
駆け上がった後、廊下を見ると何も無い所でこけている少し小柄で、空色の髪を肩まで伸ばした女子生徒を一人見かけた。
いつもならこのような事は無視していくのだが、俺はこの女子生徒を見たことがある事を思い出した。
同じクラスの名前は確か……田川凪（たがわなぎ）だったような気がする。
授業などで失敗ばかりをして目立っている上に、以前陸が行った「校内お嫁さんにしたいランキング」で二位をとっていたりなどがあったためよく覚えている。
時間はないのだがここでほかっておくのも気が引けるため、手助けをすることにする。
「田川さん……だったよね？　怪我はない？」
俺はそう言いながら右手を差し出す。
名前は間違っていないと思うが、自信がないためどうしても疑問形になってしまう。
「ありがと～。うん、大丈夫だよ」
そう言って俺の手をとって起き上がる。
「え～と……直樹くん……だったよね？」
田川さんは笑いながらそう聞いてくる。名前をあまり覚えていないのはお互い様だったようだ。
俺はその質問に対して頷くと、時間があまり無いことを思い出す。

「田川さん、時間がないから早く行こう」
表情から察するにさっきまで時間のことを忘れていたようだ。急に慌てたような顔になる。
俺と田川さんはほぼ同時に教室に向かって走りだす。
キーンコーンカーンコーン
チャイムが鳴るとほぼ同時に教室に入り、鳴り終わると同時に席に着く。
担任はまだ教室に来ていなかったため数人に笑われるだけで、注意されることもなかった。
一時間目と二時間目が終わりその間の放課。
まだ五月ではあるが日増しに気温がどんどん上昇している。
何か涼しくなる方法はないのか……。
そんなことを考えている時だった。
「彩都、覚悟しろォ」
そんな声がする方向を向くと、和弥が彩都に対して拳を振るう。
彩都は少しだけ和弥の方向を見ると注射を一本取り出し自分に射つ。
ブゥン
そんな音がしたんじゃないかと思うほど豪快に和弥の拳が空を舞った。
俺の目が間違ってなかったら彩都は今さっきまで自分の席に座っていたはずだ。
彩都の席はグランド側、つまり彩都に逃げ道はない。なら、和弥の拳は彩都に当たっているはずだ。
現に俺には当たったように見えた。
だが今、彩都は和弥の後ろにいる。
「……残像だ」
後ろから声がかかってきたことで彩都が後ろにいることに気づき和弥は拳を振り回す。
それでも和弥の拳は彩都を捉えることができず空を舞うばかりだ。

やっぱり彩都の薬の効果はすごいな……。そう素直に思いながらも、これ以上行くと怪我人が出ると思い二人を止めに行く。
「和弥！　彩都！　このままじゃ怪我人が出る。昨日のルールでいこう」
「昨日のルール？　なんだそりゃ？」
相変わらず和弥の記憶力は猫以下だ。
和弥は俺が何を言っているのか判っていないようなので彩都の方を見る。
彩都は無言で頷く。
「それじゃあ……」
「レディー・ファイト！」
さっきまで自分の席で寝ていたはずの陸が俺の後ろで急に大声で掛け声をかける。
「陸……急に後ろで声を出すのをやめてくれ。心臓に悪いから……」
そんな声も陸には届いていないようだ。最初からあんまりまともに聞いてくれるとは思ってはいなかったが……。
和弥の先制攻撃が炸裂する。
しかし炸裂したのは彩都ではなくその後ろにあった机にだ。
薬の効果で彩都の動きは極端に早くなり、運動神経は良いはずの和弥もその動きにはついていけない。
和弥は突きを乱発しているためうかつには近づけない様だが、先ほどと同じように和弥の攻撃は彩都にかすりさえもしない。
彩都は白衣の内側に手を入れながら大きく後退する。
手にした試験管を和弥に向かって投げつける。
その試験管は和弥に当たり爆発する。だが、その試験管は目眩ましや逃走のときのために使う小規模の爆発のため和弥に有効なダメージは与えていない。
だがこの時、彩都が稼いだのはダメージではなく一瞬だ。
人は意識をしていても、リアクションタイムというその状況を理解するため、つまり脳に指令がわたって筋肉を動かすまでにかか

る時間の誤差が起こってしまう。
「なるほどな、さすが彩都だ。あの一回の戦闘でもう自分の戦い方を編み出しやがったか」
陸もそのことに気づいたらしい。彩都に対して賞賛の声を上げる。
彩都らしい人の習性を活かしている戦い方と言えるだろう。
その隙を使い彩都は試験管を五本、和弥に対して投げつける。
ドゴォォォォン
爽快に思えるほどの破裂音が鳴り響き、校舎が少し揺れたように感じる。
それほどまでに彩都の試験管爆弾は強力で危険なものだ。さすがの和弥でも食らっているだろう。
爆風が漂っていて和弥の状況はよくわからないが、少なからず食らっていることは確かだ。
次の瞬きをした瞬間、彩都は宙を飛んでいた。
何が起こったか？　それは瞬きをしていたため確信はないがこの状況でそれができるのは和弥しかいない。
薬の効果が切れていたのかそれとも、ただ気を抜いていたときに狙われたからか和弥の攻撃は思いの外彩都に対して綺麗に決まる。
和弥は爆発をくらってもそのまま立っていたため負けではない。
しかし彩都は宙を待っている。
薬の効果が切れていなくても彩都の運動神経はもともと一般人の平均以下だ。
薬の効果が切れていなくても運動神経を上げる薬ではなく、あれは素早さを上げる薬だ。少しは効果があったとしても今は意味が殆ど無い。
そして俺の予想どおり彩都は背中から地面につく。
終わった。この戦いは和弥の勝ちだ。
しかしルールを忘れているのか、和弥はまだ戦いを終わろうとせず彩都に追い打ちをかけようとする。
「和弥！　終了だ。お前の勝ちだ。だから止まれ」

陸の言葉も届いているのか届いていないのかよく解らないが、和弥に止まる気配はない。
「あの馬鹿が……」
陸はそうぼやいている。止めたいのはやまやまだが生憎、俺にはその力がない。奥の手はあると言ってはあるが使っていい力ではない。
俺は陸の方を見る。……いや正確には今まで陸の居た場所を見る。
そこに陸の姿はなかった。
どこに行ったんだ？
俺はまわりを伺う。しかしその意味はあまり無かった。
俺が今さっきまで見ていた場所で歓声が上がる。
何だ？　見ている暇はないということを思っていながらも俺はそっちの方をついつい見てしまう。
すると陸が和弥の攻撃を自分の蹴りで防いでいることに気付く。
和弥の攻撃はなかなか体重がかかっていて重い一撃のはずだ。
しかしその重いはずの一撃を、陸は顔色ひとつ変えず足一本で防ぎきっている。
「止めるなよ陸。これは俺達の戦いだ」
「決着は着いたはずだ。いくらお前でも昨日のルールぐらい覚えているだろ？」
ふたりとも一歩も引かずその体制のまま会話を始める。常人には真似できない事だ。
「それはてめぇが勝手に決めたルールだ。俺がそれに従う義理はねぇ」
「それなら代わりに、俺が相手をしてやろうか？　……ただしもうすぐ授業が始まる。手加減はできないぞ」
冷たく聞いている人間の頭に響くような声を陸が出す。その声だけで決着が着いたのは言うまでもないだろう。
和弥の方は陸に任せて俺は彩都に近づく。和弥の攻撃が直撃しているのだ、ただではすまないだろう。

しかし彩都はあっさりと立ち上がる。
「彩都、体は大丈夫なのか？」
「……体の何処かが無くなっているわけではない。……問題はない筈だ」
彩都らしい返答だなと内心苦笑しながらも、授業がもうすぐ始まるというのに彩都はどこかに行こうとする。
「彩都どこに行くんだ？」
「……いや、思ったより疲れたからな。教師には僕は保健室に行っていると伝えてくれ」
そう言って彩都は教室から出て保健室に向かっていく。
まあ、教師にはという言い方から思うに彩都は化学部室に入ったのだろう。
化学部は今、彩都以外部員がいないため彩都がその部室を私物化している。そのため他の人が入ってくる可能性が低い。
彩都にとっては保健室なんかよりも居心地が良いのだろう。
和弥が単純なのか陸の話術がすごいのか、和弥と陸はもうすでに仲が直っている。
俺は彩都のことを心配しながらも、三時間目の授業にとりかかった。

# ０４話　上野

残りの授業も全て終わり放課後になる。部活に入っている人間は部活に行き、入っていない人間は自分のしたいことをしている時間だ。

いつもなら俺、陸、彩都、和弥の四人で何かをしているのだが、今日は陸と二人だけだ。

彩都はあの休み時間の後何かを思いついたのかずっと部室にこもったままらしい。和弥も今日は珍しく買い物などをするらしく俺達にはついて来なかった。

ついてきたとしてもこれは俺達のことで、自分がいても意味が無いと思ったのだろう。

俺達は今２―Ｄに向かっている。

理由は陸の友人である上野元春（うえのもとはる）をチームに誘うためだ。

陸の話だと上野はいつも放課後は教室にいるらしい。

２―Ｄに着くと陸は普通に教室に入っていく。一応他のクラスのため入るのをやめようかと思ったが、陸が俺を手招きしているので仕方なく俺も入ることにする。

上野の席は陸の席と同じ場所のようだ。

「上野、俺達と野球やらないか？」

「なんでまた野球を？」

普通の人ならこの反応をするだろう。

「何でって、そりゃあ青春だからだろ？　それ以外に理由がいるのか？」

周りの女子からキャーというような黄色い声が聞こえるが今、陸が言ってることはあまりにもしょうもないことだ。

「いや、その理由で決着が着くのはお前ぐらいだろ……」

そういった後に上野は俺に哀れみの顔を向けてくる。なんでだろ

う、目から涙が……。
　でもたしかに上野の言うとおりだ。それに今回に関しては俺しか陸の意見に賛成した人間はいない。
「それじゃあゲームで決めないか？」
「ゲーム？」
　今、陸がゲームと言っているのは多分あれの事を指しているのだろう。
「ああゲームだ。基本、ルールは簡単俺とお前が戦うそれだけだ。だがそれでは俺のほうが経験や格闘センスなどで確実に有利だろ？
　だから特別に考えた俺らのルールで戦う。それでいいだろ？」
「ああ、あの時言っていたルールか」
　その言い方から察するに上野は前、彩都と和弥が戦っていたときに食堂にいたのだろう。
「何だ、知ってたのか」
「食堂であんだけ騒いでたんだ。知らない人間のほうが珍しいと思うぞ？」
「それじゃあ説明は無用だな。行くぜ、レディー・ファイト！」
　陸の開始の合図と共にゴングが鳴り響く。
　開始早々上野はポケットに手を入れスリングショット――つまりパチンコを取り出す。
　弾となるビー玉をセットし十分に引き金を引き、放つ。
　その弾は綺麗にまっすぐ飛んでいくが逆にそれがあだとなったのか陸は体を半身反らして最小限の動きでそれを避ける。
「当たらないぜ、そんな攻撃」
「らしくないな、つめが甘いぜ？　お前が一番解っているはずだろ。狙いに関しては俺は何手先までも呼んでいるって」
　避けられたビー玉はまるでそう避けられることを予想していたかのように教室の壁に反射して陸の方に向かって跳ね返ってくる。
「あぶねぇ」
　先程のように余裕を持ってとはいかないが、バク宙をするように

うまい具合でその弾を避ける。
上野の狙いも上手いがそれ以上に陸の身体能力は高い。
上野は三連発で弾を撃ち出してくる。
その弾を今度は後退して陸は避ける。
そしてビー玉は反射して後ろに飛ぶ。ここまではさっきと同じだが、ここからがさっきと違う。
陸はビー玉が反射してくる前に、前に出る。
陸は左手を地面につき左手だけで体全体を支え蹴りを繰り出す。
手を付くのも、認められているため陸の攻撃で、陸自身が負けというわけではない。
上野は両手でその蹴りを防ぐが、その考えが間違いだったのか防御しきれずに上野は体制を少し後ろに反らしてしまう。
陸はそこに回し蹴りを入れその勝負に決着(けり)をつけようとしたが、その判断が逆に間違いであった。
後ろから跳ね返ってきたビー玉が、陸の背中に三発当たって陸は体制を崩してしまう。
上野はそこに陸の顔面に膝蹴りを溝に入れ、陸の体が宙を舞ったときにパチンコを引き絞りビー玉を陸の顔面に対して炸裂させる。
陸に対してのダメージは大きいものだろうが、顔面にビー玉を当てられて体制が後ろにずれたため、手と足以外を地面につかずになんとか体制を支えることができた。
肩を撃たれたのか陸は肩をかばっているようなことをしているが、陸の戦闘スタイルは基本は足技を使うので攻撃には関係は出ないが、やはりバランスなどが崩れてしまっていてこの様子ではいつもの動きは存分にはできないだろう。
上野は崩れたバランスを取り戻すために教室の反対側に向かって走りだす。
陸はその間を使ってポケットからひとつの武器を取り出す。
それは簡易型のスタンガンのようなもので、彩都が陸のために作った特注品だ。小型ではあるがその威力は普通の大きさのスタンガ

ンとあまり変わりのない強力な武器だ。
威力は従来の物と変わりはないが、電気の届く距離と効果時間はどうしても短くなってしまう。しかしここ一番では強力な一撃を誇る陸の、隠し玉だ。
上野はその武器に気づいたのか、陸が簡単には近づけないようにパチンコの弾を乱射している。
しかし今の陸に対してその攻撃は、威嚇にすら役だっていない。
このルール上、陸はこの武器を相手に当てればほぼ確実に勝利が決まる。
故に陸にとってはスタンガンを当てることが今、一番の優先事項なのだ。
陸は飛んで来るビー玉を気にせず一気に決着を付けに行く。
飛んでくるビー玉が陸の体に何発かあたるが、陸は体制を崩さず上野に対して殴るようにスタンガンを当てる。
その一撃で上野の体の力が抜けたようで、上野は膝を付く。
「ゲームセットだ」

## 05話　田川さん

「ゲームセットだ」
陸がそう言うと同時にゴングが鳴り響く。
「お前と一緒にいるとやっぱり楽しいな」
負けたのにもかかわらず、上野は笑いながらそう言ってくる。もともと勝敗は気にしていなかったのかもしれない。
口は動かせるようだが、まだ体に力が入らないのか地面に座り込んだままそう話しかけてくる。
「野球だったかな？　俺もチームに入れてくれよ」
「最初からそのつもりだったがな」
そして上野は陸の手を借りて立ち上がる。
「じゃあ直樹、俺達は道具を適当に集めてくる。その間に直樹はメンバー集めをしていてくれ。集合場所はグラウンドな」
そう言って陸と上野は、走って行ってしまう。スタンガンをまともに食らっているはずなのにもう普通に走れる上野の運は相当のものなのかもしれない。
俺はそのまま陸に言われたとおりにメンバー集めを続ける。
この学園は全寮制なので、授業が終わっても多くの生徒が校舎の中に残っている。だが、誰を誘おうか……。
残念ながら俺は入学してからほとんど陸たちと一緒にいたため、俺には他に友だちと言える人間は殆ど居ない。
それどころか名前をちゃんと憶えている人間も数えるほどしか居ない。
さて、どうしようか……。
そんなことを考えながら歩いていると前に田川さんが歩いているのを見かける。
今知り合いの中で、野球に誘えそうな人は田川さんしか居ない。

俺は女子を野球チームに入れてもいいのかと思いつつも田川さんに話しかける。
「田川さ～ん」
俺が声をかけた方向がわからないのか、田川さんはあたりをキョロキョロと見渡す。
「あ、直樹くん～」
俺が声をかけたことに気づいたのか俺を見つけるなり、田川さんは笑顔で飛び跳ねながら俺に手を振ってくる。
大丈夫かな……。
朝の様子を見ている限りでは田川さんはドジだ。それもただのドジではなくかなりのドジだ。
あんまり飛び跳ねてると危ないんじゃ……。
俺がそう思っていると予想通り田川さんは足を滑らせてこけてしまった。
やっぱりな……。
俺は内心そう思いながら朝と同じように、今度は無言で手を差し出す。
「ごめんね～。朝もそうだけど私迷惑ばかりかけちゃって……」
「別に気にしてないから大丈夫だって。誰にだって失敗はあるから」
なぜだろう。俺は嘘は言ってないはずなのに、何故か今すごく後悔した気分に襲われている。
なんでだろうな……。
いや今はそんなことを考えている場合ではないか。
いきなりで悪いが本題の質問に入らせてもらおう。
「田川さんいきなりで悪いんだけど野球チームに入ってくれない？」
あんまり話が唐突すぎたせいか、田川さんはあまり話を理解出来ていない様子だ。
「いいよ～」
だから俺は一瞬、田川さんの言った言葉の意味がわからなかった。
頭の中でその言葉を五回ほど反復さた後やっとその言葉の意味が

理解できる。
「て、えぇぇぇぇ」
その後、俺の口からはあまりにもすっとんきょんな声が出ていた。
これが自分の声なのだろうかと思えるほど驚いた声が出ていた。
「ど、どうしたの？」
自分のさっきの発言が原因だと思ってない田川さんは驚きあわてふためいている。
「田川さん本当にそれでいいの？」
「別に私は部活に入ってないし、面白そうだったから入ってみようかなって」
人の物事の基準は人それぞれだからいいのかな……。
そう思いながら、そろそろ陸たちが道具を集め終わる頃だと思いグラウンドへ向かう。
グラウンドではすでに陸と上野が準備体操をして待っていた。
「直樹、一人メンバーを連れてきたのか」
「陸、女子でもチームに入っていいのか？」
上野が陸にそう質問する。それは俺も一番心配していたことだった。
「ああ、もちろんオーケーだ。男ばっかでもむさくるしいだけだしな。戦力になるならなお良しだ」
戦力か……。
今日一日だけでも田川さんの運動能力がいいとは思わなかった。
誘った俺が思うのもおかしいが、戦力どころかお荷物になってしまうのではないか。
そう思ったがあの笑顔を見ていると大丈夫だと思える気がした。
その後俺たちは軽く自己紹介をして練習を始める。
うちの学校には今、野球部がないため野球道具が大量に余っていたらしい。
グラウンドは使える場所が残っているし、部室も余っている。
運が味方をしてくれたとしかいい用がない程、全てがうまくいっ

た。
今日は時間がないためキャッチボールだけだったが、それでも陸と上野はいい動きをしていた。
陸とバトルをしている時からうすうす気づいてはいたが、上野は左利きだった。
コントロールも良く運もいい上に左投げとなると、俺達のチームのピッチャーは殆ど決まったようなものだ。
そして予想通り田川さんの動きは……予想通りというか、予想以上にひどかった。
まあ、その田川さんと少ししか変わらない動きをしている俺はどうなんだろうとも思うが、そのことには触れないでおこう。

## 06話　野球盤やらないか？

練習を終わり道具を部室に入れた後、食堂まで一緒に戻ったがその後上野と田川さんと別れ、彩都と和弥と合流する。
二人の喧嘩は陸が居ないと仲裁できる人が居ないため、ほとんどの時は四人で食事をとっている。
二人には悪いが白衣をきている男と、大柄の男のコンビは滅多に居ないため分かりやすい。
今日は珍しく食事中に喧嘩が一度も起こらなかった。
珍しいこともあるんだな……。そう思っている俺はもうこの日常に慣れ親しんでしまったのだろうと思う。
そうして俺たちは四人で部屋に戻る。
部屋の中でいつも俺たちはそれぞれがしたいことをしている。
俺は宿題、陸はゲーム、和弥はトレーニング、彩都は実験をしているのがいつもの光景だ。
後半ほど普通の学生のやることではないが、それは見逃してもらいたい。
校内の規則で生徒は十時には就寝になっている。
俺もそろそろ寝ようと思っていると陸が一つ提案をする。
「なあ、野球盤やらないか？」
え？　なんで今から？
その質問をいつもなら俺がするはずだが、俺が面食らっているうちに彩都が質問をしてくれた。
「……なんで今から？」
「何言ってるんだ。青春だろ、青春！」
「お前何でも青春って言えばいいと思っているだろ」
和弥が呆れたようにツッコミを入れる。

「そんなことより野球盤やろうぜ」
そして和弥のツッコミを綺麗にスルーする。
「……僕は寝かせてもらう」
「悪いな、俺も寝かせてもらうぜ」
「俺も今日は疲れたから早めに寝かさせてもらうよ」
彩都、和弥、俺にことごとく断られさすがに傷ついているらしい。
「嘘だろぉぉぉぉぉ」
陸の声は寮中に響き渡り、陸は寮長にこっぴどく怒られたらしい。

# 07話　生徒会

この日の朝は慌ただしく始まった。
「なんで時計が壊れてるんだよ！」
こんなことを叫んでも意味が無いということを判っていながらも俺の口からは自然とそんな言葉が漏れていた。
俺の時計だけならまだ判るが、全員の時計が壊れていたのだ。
普通無いだろこんな奇跡……。
しかしどんなことがあっても遅刻は遅刻。遅れれば、ごく当たり前に遅刻扱いになるだろう。
「早く学食行こうぜ」
「いや、今からだと学食によっている時間はないぞ」
和弥の意見に陸の冷静な意見が反発する。
「……たしかにそうだな」
そこに彩都も同調する。
「飯が食えない……だと……。俺は……なんのために登校してるんだぁぁぁ」
「いや、学校は勉強するところだからな」
陸や彩都の意見に対しておかしい反応をしている和弥にツッコミを入れる。
でも朝食が抜きになるというところには辛いところがある。
確か、一限はテストだったような気がする。
朝食をとると取らないでは頭の回転が違うということを聞いたことがあるような気がする。
何にしても朝食はとりたかった……。
そうは思っていても朝食と未来。天秤に掛けるとやはり未来のほうが重い。
それはここに居る全員も解っていることだ。……ただ一人を除い

て。
「何でだよ。みんな腹減ってないのか？　トントンという包丁の規則的なリズム。そしてテーブルには温かい御飯と美味しそうな湯気を出す味噌汁が乗ってるんだぞ？　お前らはこれを美味しそうだと思わないのか？　お前らは日本人じゃないのか？」
異様な気迫で迫りながら力説する和弥の話に俺の想像力が掻き立てられる。
すごく美味そうだ。今日遅刻をしたとしても朝ごはんを食べる価値があるとさえ思う。
「今日の朝の主食はパンだ。味噌汁は着いて来ない上に、場所は食堂だ。包丁の音は感じられない上にパンは和風ではないぞ」
陸の冷静な意見で俺の理性も正常に戻る。遅刻だけは洒落にならないからな……。
まだ何か言いたそうにしている和弥をそのままにして、俺たちは教室へ急ぐ。
よっぽどのことがない限り和弥も着いて来るだろう。
全速力で教室まで走っていく。
そういえば昨日はここで田川さんにあったんだよな……。
一応そのあたりを軽く見てみるが田川さんの姿はない。
まあ二日連続で遅刻するほうが珍しいか……。俺はその一人だけど……。
チャイムぎりぎりで教室に入り、俺達はなんとか遅刻をまぬがれた。
キーンコーンカーンコーン
チャイムが鳴り地獄だったテストが終わる。
「なあ、テストはどうだった？」
休み時間が始まり四人集まってすぐそのことを聞いてきたのは和弥だ。
なんでいつも自分が勉強できないことを知ってて、和弥はテストの結果を聞いてくるのだろうか。

「……問題ない」
「まあまあだな」
彩都も陸も勉強は出来る方だ。陸のまあ満足はほぼ完璧だし、彩都が問題ないと言うならば９０点以上はとっているのだろう。
「俺もまあまあだよ。和弥は？」
「俺は過去は振り返らない男さ」
「じゃあなんで聞いてきたんだよ！」
いつものことではあるが思わずツッコミを入れてしまう。
毎回毎回、同じような流れなのになんでまたやるのだろうか？
もしかして……楽しんでいる？
……それはないか。俺はそう一人で決めつける。
和弥の言うことだ。そう意味はないのだろう。
「おい彩都、バトルしてくれねぇか？」
「……なんでだ？」
いつもならば、聞くこともせずに攻撃を仕掛ける和弥が聞いてきたため彩都も理由を聞くらしい。
「何でってそりゃ、腹が減っても戦はできるだからだ！」
「和弥……それは、腹が減っては戦はできぬだと思うぞ」
「……馬鹿だな」
「んだとてめぇ～」
その言葉が引き金となり和弥の怒りも頂点に達してくる。
そしてその様子を見て周りの生徒も盛り上がり始める。やはり二人の喧嘩を見るのもこの学園の生徒の日常の一環となっているのだろう。
「暴力はやめていただけませんか」
凛とした声が教室に響く。その途端さっきまで盛り上がっていた生徒は急に静かになった。
俺達の目の前にいるその声の主は紫色の髪を腰まで伸ばした女子生徒だ。首にはなぜかコンパスのようなものをぶら下げている。
「私は鳳瑠衣子（おおとりるいこ）と申します。去年全校生徒の前で挨拶はさせてもら

っていますが、覚えてはいないですか？」
確か去年、全校の前で挨拶をしていた生徒がいたような気がする。
確か彼女は生徒会のメンバーだったはずだ。
「知らねぇな」
さすが和弥。全校生徒の前で話していたのに覚えていないとは、さすが猫並みの記憶力の持ち主だ……。
「おい彩都！　バトルだ！」
そう言って和弥はもう一度彩都にバトルを挑む。
相変わらず和弥は人の話を聞いちゃいない。まあ、俺も止める気はないのだが……。
「ですからそういう事は……」
「鳳くん言っても無駄だということは、君が一番良く解っているのではないのか？」
そこにいたのは、黒髪でそれを肩まで伸ばしている女子生徒だ。
その女子生徒は十分美人の部類に入るのだろう。
だが、その女子生徒の異様な存在感に圧倒されてそう思うことさえもままならない。
こう言うのを威圧感というのだろうと俺はどうでもいいことを考えていた。
「誰だ、テメェは」
声を荒らげて、和弥が怒鳴るように尋ねる。
「私の名前は米谷亜矢香（よねやあやか）だ。年の初めに自己紹介はちゃんとしたつもりなのだが、人の名前はちゃんと覚えておくものだよ。そして人に名前を尋ねるときはまず自分から名乗るのが礼儀じゃないのかな。十文字君」
その女子生徒、米谷さんは馬鹿にしたように和弥に対して話しかける。
そしてその言葉が和弥の怒りに火をつける。
「お前は……俺の怒りに火をつけたことを後悔しろ」
二人とも戦闘態勢に入り、周りの生徒も盛り上がってくる。

「ちょっと待て！」
さっきまで話しに入ってこなかった陸が話しに割って入る。
陸がこの手の話を止めに来るのは珍しいな……。
「あんた、相当な実力者のようだな。この勝負俺に仕切らせてもらえないか？」
さっきまでの俺の関心を返して欲しくなるような発言をしていた。
まあ、この手の話を陸が止めるはずがないだろう。
そんなふうに納得している俺もこの日常に、慣れてしまった一人なんだろうと思う。
他の生徒のテンションもヒートアップしてきて、この盛り上がりは誰にも止められない上に、誰も止めないのだろう。
「二人には俺達のいつものルールで戦ってもらう。武器は手持ちにあるものなら何を使っても良し。ただし手持ちにあるもの以外を武器に使うのはなしだ。そしてどちらかが足と手以外を地面に着けたら終了だ。ただし米谷は女子だからバトル中一回のみ、他の道具を一個だけ補充するのを良しとする」
女子向けにルールを少しだけ陸が改定する。陸はそういう事だけはまめだ。
「このルールでいいか？」
「問題ない」
そう言って、米谷さんは教室の後ろに立てかけてある、竹刀を一本持つ。
「早くやろうぜ」
和弥にいたってはもう待ちきれないらしい。
「レディー・ファイト」
教室に陸の声が響き渡った――

## ０８話　「これが、俺の１００％だぁぁぁ」

「レディー・ファイト」
その声が掛かると同時に和弥と米谷さんが動く。
和弥は左拳を突き出す。そのタイミングにうまく合わせて、米谷さんは竹刀をぶつける。
威力の上では和弥の突きのほうが破壊力が高いだろうが、竹刀の方が接着面積が狭いため体感するダメージが大きい。
和弥は少し顔を歪める。だがそれも一瞬でありすぐに体制を立て直す。
和弥の直線的な突きに対し、米谷さんは最小限の動きでその攻撃を避ける。
攻撃数では格段に和弥のほうが多い。だがいかんせん攻撃が全く攻撃が当たっていない。
それに対し米谷さんは少ない攻撃数ではあるが、確実に和弥に対して攻撃を当てている。
一撃一撃が低かったとしても、蓄積したダメージは大きい物に変わっていく。
そして一般の女子生徒と比べると米谷さんは格段に、身体能力が全体的に高い。
攻撃が当てられるたびに和弥の顔がゆがむ。
しかしそんなダメージ稼ぎの攻撃で和弥は倒れるわけはない。それは米谷さんも解っているようで、今は本当にただ単にダメージを稼いでいるだけのようだ。
和弥は少し溜めてから突きを出す。その突きは米谷さんに当たることはなく机に当たる。だが机が飛んだことにより米谷さんは和弥と距離を置かなければならなくなる。

もともと体力に自信がある和弥だ。その短時間だけでも体制を元に戻すには十分な時間だ。
机が飛び交うのが止まると同時に米谷さんは前に出て、竹刀での力を込めた一撃を放つ。
並の人間が相手であれば、その一撃は致命的な痛手となったであろう。
だが、同年代から遺脱した身体能力とスタミナが自慢の和弥からしてみればその攻撃は恐るに足らないものなのだろう。それどころか、その後の反撃ダメージのことを考えるとむしろ恐れる必要があるのは和弥の攻撃だとさえ思う。
彩都と戦っているときは、あまり強く感じない和弥だがそれは戦闘スタイルの違いからだ。和弥と同じように肉弾戦もしくは、接近戦を戦闘スタイルにしている人間に対しては和弥は超人的な強さを誇っている。
和弥はその一撃を右手一本で受け止める。米谷さんは和弥の攻撃を警戒し、竹刀を手放しその場から一歩後退する。
しかし和弥の狙いは最初から米谷さんでなく、米谷さんが使っていた竹刀だ。
和弥はその竹刀を両手で持ち、膝蹴りを入れる。
ベキッ
そんな音を立てて竹刀は綺麗に木端微塵にされる。もうあの竹刀は使いものにならないだろう。
和弥は勝利を確信して不敵な笑いをするが、米谷さんもそれに対し似たような笑いを返す。
「山崎君、ルールでは女子は一度だけ武器の補充をできたはずだ。それなら今ここでそのルールを行使させてもらう」
「ルールの行使は米谷、お前の自由だがその間もバトルは続いている。そのせいで倒されたとしても異議は認めない。そこだけは了承してくれ」
分かっている。そう一言を発し、米谷さんは和弥の攻撃を避けな

がら教室の後ろに立てかけてあるもう一本の竹刀を握る。
和弥の渾身の突きが米谷さんに対して繰り出される。今度は米谷さんはその攻撃を竹刀で受けず、反身開いてその攻撃を避ける。
そしてそのまま流れるように和弥の背中に対して竹刀を叩きつける。
しかし和弥はそのまま叩かれていることを気にせず突きを乱発する。
和弥の攻撃は一撃一撃が重いせいで、米谷さんはその攻撃を避けなければならない。
そのタイミングを使い和弥は渾身の一撃を放つ。その一撃は文字通りの一撃必殺だ。
「もらったぁぁ」
和弥は勝利を確信したのか雄叫びを上げるように叫びながらその一撃を放つ。
しかしその攻撃は一歩遅く、米谷さんが和弥の後ろにまわった後に炸裂した。
その隙を狙い米谷さんは、胴、小手、突きと三連続で竹刀を叩きつける。
「そろそろ体も温まってきたことだ、私の本気を見してやろう」
「あ？　今までが本気じゃねぇとでも言いてぇのか？」
「その通りだ。ここからはさっきまでのようにはいかないぞ」
そう言いながら米谷さんは竹刀を構え直す。
だがそこから米谷さんは、一切動きを取らず目を閉じる。
「はっ、何が本気だ！　だったら俺も本気を見してやろうじゃねかぁ！」
和弥は力任せに米谷さんに殴りかかる。
和弥が机の多くを飛ばしていることによって、普通の状態の教室よりかは戦い易くなっている。
しかし、今米谷さんがいる場所は後ろに壁、横には机が連なっていて避けることは上手くいかないはずだ。

しかし米谷さんはその攻撃を避けて見せ、和弥の後ろに回り込む。
……いや避けたは正しくないかのしれない。
和弥の攻撃の後の米谷さんの動きは素早く、目で追うことすらできないほどのものだったからだ。
米谷さんはまだ振り向く前の和弥に対し、竹刀を肩、胴、小手、足と四連続で叩きつける。
そして和弥が振り向き攻撃をすると合時にまた米谷さんは、和弥の後ろに回り込む。
今度は野球のバッティングのように竹刀を振り和弥に当てる。
和弥は吹き飛ぶことはないが、前よりも後ろのほうがダメージを食らいやすい。
痛みに顔を歪めるが、和弥は振り向きワン・ツーのリズムで右、左の順に突きを出す。
しかし米谷さんの動きは素早く、その攻撃をまるで最初から予想していたかのようにタイミングを合わせ一撃一撃の短い隙の間に竹刀を当てる。
危険を感じたのか、和弥は後ろに下がるがすでにタイミングが遅すぎる。
その下がるときの短い隙で肩、足を叩きつけられる。
そして下がったところで、和弥はこのバトルから逃げるわけにはいかない。
和弥は力を溜めるようにその場で拳を引く。
たしかに和弥が勝つ方法は強力な一撃を米谷さんに当てることしか無い。
だが、今和弥が力を溜めている場所は米谷さんの目の前だ。
そんな場所では十分に集中することはできない。そのうえ、そんな場所では米谷さんの恰好の獲物だ。
米谷さんは和弥に容赦なく、和弥に対し竹刀を振るう。
その竹刀は、顔には当たってはいないが胴、肩、足、小手などに容赦のない一撃が何度も当てられる。

「これが、俺の１００％だぁぁぁ」
そして和弥が溜めていた力を一気に解放する。
和弥自身が１００％と言ったように、さっきまでの突きの威力に比べれば明らかにケタ違いの攻撃力だ。
攻撃力はは申し分ない。和弥の持ち前の猫以下の集中力さえ治れば、完璧な攻撃だろう。
しかし、その攻撃も米谷さんの中では予想内なのか、またしても米谷さんは和弥の後ろに回り込む。
そして米谷さんはそのままの勢いを使い、鋭い突きを出してくる。
ドガッ
鈍い音が鳴り和弥にその攻撃が当たる。
そのまま勢いに任せ、米谷さんは竹刀を振るう。
そしてそのままバランスを崩し、膝を地面についてしまう。
教室がしんと静かになった。
この勝負は米谷さんの勝ちだ。
「私に勝ちたかったら、もう少し強くなることだな。少なくとも……今の君では、私に勝つことはかなわない」
そう言って米谷さんは教室を出ていってしまう。
「おい、授業始めるぞ。席に着け」
教室に入ってきた教師の言葉が聞こえてくる。どうやらバトルに集中しすぎてチャイムの音も聞こえてこなかったらしい。
そういえば、米谷さんはさっき教室を出て行ったが教師には止められなかったのだろうか。
「おい、十文字。授業始めるぞ、そんなところで寝るな」
今さっきまで竹刀で殴られ続けてボロボロの和弥に対して、教師のの言葉が響く。
「和弥～、授業始まるぞ～。起きろ～」
俺はあくまで、さっきまで何もなかったかのように和弥を起こす。
可哀想にな。
内心、俺はそんなことを思いながら和弥に肩を貸し席に着いた。

## 09話　チーム名

そして授業も終わり昼休み。
俺達はいつもの四人で、昼食をとっていた。
「陸、そういえばチーム名って決まってるのか？」
俺は少し疑問に思いそのことを陸に聞いてみる。
陸の口からチーム名が出たことはこれまで一度もない。さすがに自分から言っておいてチーム名を決めて無いなんてことはないと思うが……。
「そういえば、まだ決めてないな……」
おいおいおい……。
「お前って大切なこと、たまに忘れるよな」
和弥のツッコミも的確だ。
「チーム名か……。どんなのにするか……」
そのツッコミを綺麗にスルーして陸は、話を続ける。
和弥は椅子の上でいじけて暗いオーラを出しているが、ほかっておけば治るので今は無視しておこう。
「ベースボールファイターズってのはどうだ？」
なんとなく頭に浮かんだ名前を言う。
「おっ、その名前いいな。チーム名はベースボールファイターズに決定な」
俺のなんとなく思いついたチーム名で決まってしまった。こんなのでいいのか？
「さすが直樹。いい名前じゃないか。気に入ったぜ」
さっきまで落ち込んでいたはずの和弥も復活して話に入ってくる。
「……お前はメンバーではないだろうが」
これでいいのか……。まあこれが俺たちだよな。

そう、一人で納得した俺は、少し微笑んでいたかもしれない。
今日も一日の授業が終わる。
今日の最後の授業は実験をやった。
実験をやるときはかならず授業に出ているはずの彩都は、今日はいなかった。
珍しいこともあるもんだな……。
そんなことを思いながら、俺はグラウンドへ向かう。
今日はメンバー集めをせず、練習をすることになっているからだ。
みんなは先にグラウンドに行っているため、急いで教室を出ると和弥が後ろから着いてきた。
「和弥、なんでついてくるんだ？」
そう俺が訊くと和弥はいきなり俺に対して土下座をし始めた。
「お願いします。直樹様、俺もチームに入れてください」
「え、なんだよ。これは新手のいじめか？」
和弥なりに本気なのだろうが、どうしてもツッコミがでてしまう。
「チームに入っていいかは、陸に聞いてからだけだけど……何故急に？」
最初の時は確か、知らない奴と力をあわせるのがなんとかと言って断っていたはずだ。
「いや、彩都はお前たちといなくても化学部があるだろ？　だけど俺はお前といなきゃだめなんだよ。この気持受け取ってくれよ、直樹」
なぜだか周りで何名かの女子がこっちを見てキャーキャー言っている。「ＢＬよ！　ビーエル！」とか叫んでいるが断じてそういう関係でない。虚しくなってきた……。なんでだろうな……。
とにかく俺は和弥とグラウンドに出る。そこにはすでに、みんな揃っていた。
「遅いぜ直樹。……なんで和弥が居るんだ？」
陸もそのことに対し、少し首をかしげている。
「いや、なんでも和弥も野球がやりたくなったって言ってて……」

「そりゃ大歓迎だ。ほらな直樹。分かってくれる時はきただろ？」
たしかに陸はそんなことを言っていたような気がする。
「今日の練習はフリーバッティングでの守備練習だ。ピッチャーは上野、バッターは直樹、俺はショートを守る。田川はセンターを守ってくれ」
「おいおい陸、俺のことを忘れるなよ」
そう、和弥は陸に笑いながら聞く。
「お前は誰だ」
さっき歓迎していたはずなのに誰だはないだろ……。
「陸、冗談でも傷つくぜ」
「俺は本気だが？」
「何故だぁぁぁ」
当たり前のように言った陸の言葉に対して和弥はノックアウトされる。
相変わらず和弥はメンタル面は最悪だな……。
「そうマジになんなって、冗談だ。和弥はファーストを守ってくれ」
それを聞いて足早に和弥はファーストへ向かう。
「陸くん、センターって何ですか？」
「さすが田川だな。そこからの説明か……。センターっていうのはあそこら辺な」
そう言って陸はセンターの場所を指さして教える。
「そしてボールが来たらそのボールを上野に投げ返してくれ」
「ありがとう、陸くん」
そう言って田川さんはセンターの場所へ向かう。
「上野、今日は全部真ん中の球を投げて欲しいんだが……。出来るな？」
陸は相変わらずむちゃくちゃな注文をしている。
「いいぜ、真ん中だな」
そう言って上野はそのまま納得してしまう。
バッターボックスに入る前に一応、上野に確認しておく。

「全部真ん中になんて出来るのか？」
「さあな、体調が悪くなけりゃできない話じゃないと思うぞ」
そう言って上野は陸とキャッチボールを始めてしまう。
上野の狙いに関しては、前の陸とのバトルで立証されている。本当に出来ない話ではないだろう
俺は自分のやることに集中する。
野球は小さい頃遊んだことがあるため、大体のルールは知っている。細かいルールはあまり知らないが、今回の練習では関係ないためゆっくり覚えよう。
そうして俺はバッターボックスに入る。
バットを構え上野の動きに集中しようとする。
一球目
上野は振りかぶって投げる。
ど真ん中の直球。打ちやすい絶好球だ。
カァァン
しかし、俺はボールを前に飛ばすことが出来ず後ろに飛んでいってしまう。ファールだ。
二球目
今度も上野の球はど真ん中。
すごいコントロールがいいな……。俺はそんなことを考えながらバットを振り抜く。
カキィィン
心地よい音がしてボールが三遊間。つまりサードとショートの間に飛ぶ。
抜けるか……。
そう思っていると、陸がボールを捕球する。手前でボールが跳ねてしてショートバウンドになったというのに、陸はそれを難なく捌く。
そのまま一回転をして体勢を直しファーストの和弥に向かってボールを投げる。

パァン
和弥のファーストミットに丁度良くボールが収まる。タイミング的にアウトだ。まあ、ボールが前に飛んだだけタイミングはあってきたか……。
そんなふうに練習を夕方まで続けた。
俺が思っていたより遥かに上野のコントロールは良く、５０球中の４８球が真ん中にきていた。その中でも俺がバットに当てることができたのは、２７球。その中で前に飛んだのは、半分以下の１１球。そのうちヒットになったのは、４球しか無い。
運動神経は良い方ではないことは自覚してはいたが、それでも散々な結果だ。
「こんなに運動神経悪かったっけ……俺」
最近体をあまり動かしていなかったためか、疲れもひどい。
今度からは準備運動をやってからじゃないといけない。明日の筋肉痛は覚悟しないといけないな……。
俺達は野球道具を、勝手に占領した部室に入れる。
少し罪悪感はあるが、俺の友人で既に部室を私物化している奴が居るので問題はないだろう。
俺はふと空を見上げた。紫がかった空がどこまでも続いていた。
一番星が頭上できらめいていた。

# 10話　忠告

片付けも終わり、食堂に夕食を食べに行こうとすると沙希が木陰から俺たちを見ていたのが見えた。
沙希とは小村沙希（こむらさき）と言い、中学時代の俺の知り合いだ。風紀委員に所属しており、次期風紀委員長最有力候補だ。
このとき沙希はすぐに校舎に戻っていってしまったため、声をかけなかった。だが、この時に何故俺たちを見ていたのか、沙希に聞いておけば良かったと思った。
俺達三人は、先に来ていた彩都と合流して夕食を食べる。俺達の中では最初に来た奴が席を取り、最後に来た奴が食事を取ってくるようにしている。
俺は沙希が食堂にいないか探していたので、食事を取ってくるはめになった。
みんなに何が食べたいか聞き、その金を受け取る。今日は練習をしていたため少し遅めになったためか、かなり簡単に欲しい物を頼めた。
そして頼んだものが出来るのを、少しの時間待っていると女子生徒が俺に話しかけてくる。
「君は確か、秋陽君だったね」
声のしたほうを向くと、声の主は米谷さんだった。
「君達はこの頃放課後に、面白いことをやっているようじゃないか」
「面白いかはどうか知らないけど、野球の練習ならしてますよ」
「そうか、それは楽しそうだな」
そう言われ、しばし二人で笑いあう。
「だが、気をつけたほうがいい」
「えっ」
急に米谷さんは声のトーンを落とす。さっきまでのふざけたよう

な雰囲気と違い、一気に真面目な雰囲気になる。
それは脅しているというより、本気で忠告しているようだ。
「何で……ですか？」
「私は人が楽しんでいることを止めるのは、不粋だと思っているが真面目な方々は君達を本気で止めに来る。たしかに山崎君がいることで少しの間は大丈夫かもしれないが、生徒の中にも教師の中にもそのことを楽しく思っていない輩は、少なからずいるものだからね」
「鳳さんとかですか？」
「いや、鳳君の考えはどちらかというと私の考えと近いものだよ。生徒会という立場上あのようになってしまうだけでね。だが鳳君はあれでなかなか敵にまわすと厄介だよ。気をつけたほうがいい」
そう言って米谷さんは自分の頼んだものを持って席に行ってしまった。
そのタイミングを見計らったかのように丁度よく、頼んだ食事が出てくる。
そして席に戻り、今の米谷さんの話を伝える。
「たしかに、そのことは早めに手を打ったほうがいいな……」
その話を聞いて俺が予想していたよりあっさりと納得した。
俺は陸のことだからもう手を打っているか、全てを運に任せるかと思っていたため意外な反応だった。
「……だったら、米谷を引き入れてみたらどうだ。教師の信頼もある上に、生徒会からの信頼ならお前よりか上だろう」
どういう手を打とうか悩んでいると、意外なところから助け舟が出される。
「たしかに米谷の運動神経は良かったようだし、それが一番良い案なのかもな」
その言葉を最後に俺達の話し合いは終わる。
持ってきたのは俺だが、みんなのほうが食べるのが早かったため俺も食器を片付けみんなと部屋に戻る。
「じゃあ俺は漫画読んでるから。できるだけ話しかけないでくれよ」

そう言って陸は部屋に入ってすぐ、漫画を読み始めてしまう。
そういえば陸はいつ宿題をしているのだろう。
「……僕も実験をさせてもらう。……絶対に話しかけないでくれ」
そう言って彩都はベランダに出て、実験を始めてしまう。驚くことに他の部屋から苦情が来たことは一度もない。すべて責任をもって匂いなり何なりを中和とかしてるんじゃないか？
俺は宿題をやるか……。
そう思って宿題をやり始めるといつもなら聞こえてくるはずの声が聞こえてこないことに気付く。いつもなら筋トレをしている和弥の声が聞こえてくるんだが……。
そう思っていつも和弥が筋トレをしている場所を見る。するとその場所を見る前に、俺の右横に和弥が見えた。
「おわぁぁぁ」
よく解らない叫び声が俺の口から出て同時にベランダから爆発音が聞こえてきた。同時にガラスが割れる音がする。
「……話しかけるのは止めてくれといったが、言葉が足りなかったようだ。大きな声を出すのもやめてくれ。……死人を出したくないのならだが」
珍しく少し怒り気味の声で、彩都が話しかけてくる。悪かったと、手を目の前で合わせて詫びる。
いつものことであるが漫画を読んでいるときの陸は、どんなことをしても漫画に集中している。
「和弥、別に宿題を写すのはいいから気配を消して俺の横に座るのをやめてくれ」
一体この大がらの男の気配がどうやったら消えるのかも、疑問だが今更そんなことにはツッコミを入れない。
そしてそのまま和弥と宿題をやり、先に寝かさせてもらうことにする。和弥はいつも俺の宿題を写した後にも筋トレをする。
みんな夜遅くまで自分の趣味のようなことをやっているため、だいたい俺が一番最初に寝ることになる。

時計を買い替えていないから、早く起きるようにしないとな……。
俺はそんなことを思いながら、眠りに着いた。

# 11話　飼育係

今日は早く起きようと思っていたからか、いつもより格段に早く起きることが出来た。
カーテンの隙間から外を覗くと、少しずつ明るくなってきている。日が出てくる瞬間を見たのは、何年ぶりだろうか。
俺が少しの間、感傷に浸っていると和弥が起きたらしくベットからもぞもぞと這い出てくる。
「お、直樹。早いじゃねぇか」
俺が早く起きていたのが意外だってらしく、驚いたように話しかけてくる。
「和弥も早いな……。意外だなお前がこんな早く起きているなんて……」
俺のイメージでは和弥は早起きが苦手で、遅刻の常連のようなキャラだ。
「早起きは慣れてるからな。今からトレーニングに走ってくるんだが、直樹もどうだ？」
そんなごく自然に当たり前のように誘われても困るんだが……。
「遠慮させてもらうよ。朝から汗もかきたくないし」
その言葉を聞き、わかったと返事をして和弥は部屋から出て行く。
慣れていると言っていたということは、和弥はいつもこの時間に起きて走っているのだろうか？　確か和弥はいつも俺より遅く起きていたはずだ。
まあどちらでもいいか。俺の人生に深く関わってくる問題でもない。
そう納得し俺は頭をすっきりさせる意味も含めて、軽く散歩をすることにする。
今日は土曜のため授業は午前で終了だ。そして、この学園では土日には外出が許可されている。

時計が壊れているから買い換えないといけないな……。
この時間帯に起きている人はそうそういない。たとえ居たとしても、そのほとんどは自分の部屋の中に居るため人に合うことはそうない。
そのまま俺は、目的地でもある中庭へ向かう。そこには俺の思っていたとおり、短く黄色い髪に動物の髪留めをしている女子生徒の後ろ姿があった。
「田中さん」
俺はその女子生徒の背中に声をかける。彼女はぴょこっとこっちを向いて
「直樹くん、どうしたの？　私に何か用？」
と、不思議そうに言った。
この女子生徒の名前は田中美貴（たなかみき）。この学園内に居る、野生の動物の世話をしている生徒だ。
一年の時に今日のように早起きしたとき、同じように中庭に来たとき田中さんが動物に餌をあげていたのが初めて田中さんとあった時だ。
その時から、俺は早起きしたときちょくちょく中庭に来ている。
この学園にそのような活動があるのではなく、彼女自身が自主的にやっている活動だ。
そのため学園からの活動金は全く出ていないはずだ。しかし、田中さんは毎日この時間帯にここに来て餌を与えているらしい。
前に一回だけ彼女に興味本位から資金源のことを聞いてみたのだが、うまくはぐらかされ真相は聞けていない。
「そういえば、田中さんは何で毎日餌をあげに来ているの？」
前々から疑問に思っていたことを聞いてみる。さっきも言ったとおり、この学園にそのような活動があるわけではない。彼女がそれをやる必要はない上に、義務もないはずだ。
しかし彼女はごく当たり前に、
「だってもう、一回餌をあげちゃったじゃん。ボクが好きであげた

んだから、せめて卒業するまでは責任を持たないとね」
そう言ってくる。
田中さんはそのことを当たり前のように行っているがそうそう出来ることではない。金銭関係の問題もあるし、普通はそこまで長続きするものでないだろう。
「手伝うよ」
だから俺は彼女のやっていることを手伝おうとする。缶詰を一つ取りその缶詰を開ける。これは猫の餌だろうか？
そんなことを思った俺だが、すぐにそんなことを思っているよりすぐに逃げるべきだったということに気付かされる。
匂いに誘われたのか、数十匹の猫が集まってくる。既に犬や鳥などが数匹いるが、猫は他の動物より格段に数が多い。だが俺はその数に感心している場合ではないということに気づく。なぜかというとその様子は俺の知っている猫と少し違い、さながら獲物を狙っている肉食動物のようだからだ。
餌に群がってきた猫たちが、俺に向かって飛び掛ってくる。
飛び掛ってきた猫たちは餌を取る事よりもどちらかというと俺をひっかくことに集中しているように思えるほど、俺は体中を引っかかれる。
しばらくして俺が餌を落とすと猫たちは俺より餌に興味が出たのか、そちらの方に走っていく。
「直樹くん大丈夫？　ずいぶんと玩具扱いされていたようだけど……」
そう見えていたのなら出来れば助けて欲しかった……。
とは言っても、ここで田中さんと言い合いになっても仕方がない。
「……ああ、大丈夫だ」
猫が自由気侭（きまま）なのは解るが、さすがにこれは無いんじゃないかと思うほど強力な団結力と攻撃力だった。
「猫に餌をあげるときは一番気を付けないといけないからね」
そう言って彼女は、猫の餌の缶詰を開ける。しかし、俺の時のよ

うに田中さんのまわりに猫が群がるようなことは起こっていない。
それどころか猫たちはちゃんと餌が皿にわけられることを待ってさえもいる。
「はい、どうぞ」
田中さんは優しい笑みを浮かべながら平等に皿分けした餌皿三つを、猫たちの目の前に差し出す。
さっきまでの大人しさが嘘のように、争うように餌を食べ始める。
「こうなったら猫も可愛いもんだな」
そう言いながら俺は目の前に居る、白い毛並みの猫を撫でる。しかしその手が邪魔だったのか俺の手は、払われてしまう。
「動物は、なんだって可愛いよ？　それとも動物は嫌いなの？」
彼女は目の前に居る猫を撫でながら俺にそんなことを聞いてくる。
動物は嫌いではない、むしろ好きだった方ではないのかと思う。
昔はよくみんなで動物を飼ったりもしていたが、今ではそんな事はしなくなった。
餌代が勿体無くなったのか、ちゃんと面倒をみるのが面倒になったのか今ではよく覚えていない。
一つ推測できるのはその時俺達の中で、動物を飼うことが一種のブームだったのだろう。
しかし、いくら一時期、物凄くひがついていたとしてもブームはブーム時が経てば忘れられた間に見ては懐かしいと思われる。
その程度のものだ。ブームなんてものは。
「ん？　どうしたの？　なんか答えにくい話題だった？」
俺が少し暗い顔をしていたせいか、彼女はそう聞いてくる。
「いや、大丈夫だよ。でも、そろそろ時間だし俺は先に戻っているから」
俺はそう言って少し早足気味で校舎の中に戻った。
あのままあの場所に居たくなかったのもあったのかもしれないが、食堂に行くのにちょうどいいぐらいの時間になっていたのもある。
まだ少し早かったかもしれないが、食堂で場所を取るぐらいには

ちょうどいい時間にはなっている。
だが少しして、食堂へ向かう人数がこの時間にしては多すぎるということに気付く。
それにまだ全然間に合う時間だというのに、大半の生徒が走っている。
また和弥と彩都が喧嘩をしているのかもしれない。
止めることは出来やしないが、ルールを提示しないと二人とも頭に血が上ってしまって集収がつかなくなってしまうだろう。
そう思い俺は少し急いで食堂へ向かう。
しかし食堂で戦っていたのは俺の予想と少し違い、和弥と米谷さんだった。
和弥の後ろには、陸と彩都が居る。
昨日絶対的な力の差を見せつけられたというのに、何故和弥は米谷さんと戦っているのだろう。そう疑問に思い俺は陸たちの居る方へと向かう。
「陸、なんで和弥がまた米谷さんと戦っているんだ？」
「よっ、直樹。昨日米谷を引き入れてみたらうまくいくんじゃないかと話し合っただろ？　だから俺達が勝ったら仲間に入ってもらうって交換条件で戦っているんだ」
「それはずいぶん都合のいい交換条件で……」
よくそんな条件で米谷さんは了解したな……。どんな条件にしろ俺だったら絶対にそんな条件では戦わないだろう。
「まあ、それだけ自分の力に自信があるか、相当戦いたかったかのどっちかじゃないか？」
俺は和弥と米谷さんが戦っている方を見る。
昨日よりかは和弥は善戦しているようだが、相変わらず米谷さんのほうが優勢のようだ。
米谷さんは和弥の正面から瞬時に後ろに回り込む。
「消えた？！」
しかしその動きはまさに電光石火の早業で、戦っている和弥本人

からしてみれば米谷さんが消えたようにしか見えないだろう。
「つまらんな」
その一言で和弥は米谷さんが後ろにいるということに気付くことが出来る。
しかし既に和弥に振り向く時間は必要ない。
竹刀でのと止めの一太刀が入り、和弥は前のめりに倒れる形となる。
和弥の体が床についたことでこの勝負も米谷さんの勝ちだ。
「前にも言っただろう。今の君ではどうあがいても、私には勝てないよ」
米谷さんはそう冷たく言い放つ。
ドクン
その時一瞬、世界が歪んだような感覚に襲われる。
しかし世界が歪んでいるのではなく自分の体がおかしくなっているということに気付く。
この感覚は……。
ドクン
「ぐっ」
さっきよりも強い歪みと激しい頭痛に襲われる。
俺はあまりの痛みにその場に倒れこんでしまう。
こんなに痛くなかったと思ったんだが……。
彩都の薬のおかげでこの頃、直弥と人格を交代していなかったせいで余計に痛いように感じてしまう。
「おい、直樹！　大丈夫か！」
陸の呼びかけが聞こえてくる。……がもうそれに答える力も残っていない。
そして痛みで気絶したのか直弥と交代したのかよく解らないうちに俺の意識は途切れた……。

## 12話　直弥

意識がやっと秋陽直樹からこちら側に交代する。
斉藤彩都の強力な薬のせいで、長らくこの体を使えていなかった。
長い間精神の状態では、腕が鈍ってしまいますからね。今日は少し、本気を出させてもらいますか……。
「山崎陸。なかなか面白いことをしているではないですか。僕も混ぜさせてもらえないですか？」
山崎陸は一瞬、驚いたような顔をして話しかけ直してくる。
「……直弥か。……わかった、いいだろう。ただし俺達のルールには従ってもらう。いいな」
山崎陸は有無を言わせないように少し冷たい声で、早口で話してくる。
元々こちらもそのつもりだ。
「分かっていますよ、山崎陸。ルールのない勝負では一方的な展開で面白くありませんからね」
その言葉に反応したように米谷亜弥香の顔つき……いや雰囲気、存在感さえも変わる。
「秋陽君……いや直弥君だったか。それはどういう意味だ」
このような威圧感を出した喋り方ということは、意味が分かっていないと言う訳ではないだろう。
大方、嘘をついても私には分かる。だから正直に言えといったところでしょうか……。
もともと嘘を付く気はありませんけどね。
「あなたでは僕の遊び相手になったとしても、まともな勝負にはならないということですよ」

「やってみなければ分からないじゃないか。そんなこと」
それでも、あくまで冷静に米谷亜弥香はそう答える。
「いや分かりますよ。僕とあなたでは育った環境が違いすぎる」
「ならば出せばいいじゃないか。その本気とやらを」
そこで米谷亜弥香は間を置き、持っていた竹刀を構える。
「ただし貴様はそこまでのことを言った。私の手加減は……期待するな」
そのまま米谷亜弥香は山崎陸の合図を待たずに、攻撃を仕掛けてくる。
力任せではあるが綺麗な一閃突（いっせんづき）だ。しかし綺麗なゆえ、その力任せの攻撃は安易に避けられるものでしか無い。
その突きを必要最小限の動き、つまり右側に一歩動くだけで避ける。
そしてその状況から米谷亜弥香はこちらに振り向き面、右肩への斬りつけ、と連続した攻撃へとつなげてくる。
怒りに任せた攻撃は、攻撃力は高い。しかし、いかなる強力な攻撃も当たらなければ意味を持ち得ない。
一撃目の面を後ろに一歩下がることで避け、二撃目の斬りつけは左側に一歩動くことで避けきる。
今までこちらに攻撃は、一切当たっていない。
いつもの米谷亜弥香であれば、ここで戦闘スタイルを変えるなどして何かしらの対応はするのだろう。
しかし今の米谷亜弥香はそれをしない。
――いや出来ないといったほうが正しいのであろう。
米谷亜弥香のような人間がここまで苔にされたのだ。
できるだけ瞬殺を決めて、この鬱憤を晴らそうというのはごく簡単に読める考えだろう。
そして次の米谷亜弥香の竹刀での突きを、こちらに当たる瞬間で一回目と同じように右側に動くことで避ける。
当てるためのその一撃には、当たると思った瞬間に体重と勢いが

かかっている。そのため、それが当たらなかった場合は思うようには止まることは出来ない。
その間にこちらは掃除道具入れから、掃く側が取れている柄の長い箒を一本取り出す。
そして米谷亜弥香がこちらを向くと同時にこちらは腰を低くし、棒を構えこちらに戦闘意欲があることを示しながら対峙する。
「……確か、男子の戦闘中の武器の補充は協定違反ではなかったかね？」
「山崎陸の合図は掛かっていません。なら戦闘は始まっていないのは明白。そして、僕は攻撃を一切してません。あなたがただ勝手に攻撃を仕掛けてきた、それだけです」
その言葉を聞いたからか、戦闘が中断されている今を狙ったのか山崎陸が合図をかける。
「レディー・ファイト！」
その合図と共に飽きもせず米谷亜弥香はまた、こちらに向かって突きを入れてくる。
「あぁあああああっ！」
動きはさして先ほどと変わらず一直線。
賢くない人ですね。もう少し賢い人だと思っていましたが、僕の思い違いでしたか……。
先ほどと同じ攻撃を、先ほどと同じ動きで避ける。しかしその次の動きが先ほどまでと違った。
その避けられた突きの勢いを軸にして、強力な斬撃を叩き込んでくる。
「うっ……」
その一撃は刃の付いている真剣で攻撃されたので無いのにもかかわらず、刃で切られたように深くえぐるような一撃だ。
その攻撃で数歩分後退させられるが、体への直撃を防ぐことには成功する。
しかし、衝撃まで殺すことは出来ず衝撃は体に残り全身が痺れ一

瞬だけ動けなくなり体に力が入らなくなる。
体に感覚が戻ると同時に棒を振るう。
その攻撃は米谷亜弥香の竹刀に防がれ互いの獲物を合わせて一次均衡状態にはいる。
互いに力押しで相手を倒そうとするが、当たり前に力ではこちらが優っている。
力では勝てないと判断するやいなや、米谷亜弥香は後ろに退き数歩距離を取る。
「やはり貴様の戦闘スタイルは私と同じものか……」
「おや、そんなことを考えていたのですか。それで負けたとしても言い訳にすらなりませんよ」
米谷亜弥香はその挑発には乗らず、体の力を抜き何故か構えをしないスタンスを取る。
「やはり面白い方ですよ、あなたは」
そう言い前へ出ながら左肩、右腰、左足への素早い三連撃を繰り出す。
その攻撃に対しての素早いという表現は少し間違っているかもしれない。
その攻撃は一般人には避けることは愚か、肉眼で目視することすら困難な攻撃だからだ。
しかし、米谷亜弥香はその三連撃を全て竹刀で防ぎきる。
一、二発目は流れと勢いでつなげることに成功するが三発目の攻撃は勢いまでも、止められてしまう。
「くっ……」
そこから米谷亜弥香は素早い切り返しで、叩き落とすような勢いの面を撃ってくる。
間一髪でほうきを盾にし、その攻撃を防ぐことには成功する。
しかし、竹刀の勢いは衰えずぶつかり合ったそこから衝撃が伝わってくる。その衝撃で体に自由が効かなくなる。
衝撃でできた動くことの出来ない一瞬の隙。それを米谷亜弥香は

見逃さず強力な一太刀を撃ちこんでくる。
米谷亜弥香はほうきの上にその一太刀を撃ちこんでくる。
そのためその攻撃自体の体への負担は一切無い。
しかしそのすぐ後で、その攻撃の意味が解る。
先ほど衝撃で動けなかったほどの威力を持つ攻撃を、横から受けるとどうなるかということが。
その考えに気づいたときにはもう遅く、壁に向かって宙を舞っている。
気付くのが少し……遅かったですか。
勢い良く壁に激突し、そのまま重力のせいで下へ、床の方へ落ちていく。
「今のは効きましたよ。米谷亜弥香」
着地は両手両足で床につくことが出来、ルール上まだこちらの負けではない。しかし――
少々肉体への負担が大きすぎますね……。さすがにあの速さで壁に激突するには少し無理がありましたか……。
「……しぶといな貴様、まだ手足以外を床についていないのか。しかしあまり往生際の悪い男は嫌われるぞ」
「別に構いませんよ。僕は好かれるために存在しているわけではありませんからね。それにまだ何があるかは分かりません。簡単に諦めてしまっては面白みがありません」
「よくその状況で減らず口が叩けるな」
米谷亜弥香はそう、皮肉のように言う。
「……減らず口かどうかは」
その言葉の途中であえてまだ油断している米谷亜弥香に近づく。
「やってみなければ分かりませんよ」
その言葉と共に、米谷亜弥香の目の前に出る。そしてそのまま腹部に初撃を叩き込む。
予想外の攻撃だったためか、その攻撃はあっさりと入る。
しかし一撃だけでもその後に得ることの出来る収穫は大きいもの

となる。
そこから、手足を中心に狙った高速の棒での乱舞(らんぶ)を繰り出す。
最初のうちは攻撃の全てを防いでいた米谷亜弥香だが、時間が経てば経つほど徐々に攻撃が彼女にかすり始める。
基本、片方でしか攻撃や防御を行えない竹刀に対し、こちらの武器は両側でそれが行える。
故に同じような行動の繰り返しでは、最初が五分五分だとしても徐々に手数が足りなくなりジリジリと状況が悪くなっていくだけだ。
六十回以上攻撃を繰り返した後、ついに米谷亜弥香に対し左肩、右腰、回転してからの右側頭部への叩きつけと、腹部正面への突きが直撃する。
その勢いで米谷亜弥香は後ろに数歩分後退するが、床に倒れこむことはない。
さすがですよ、米谷亜弥香。ですが……
「これで終わりです」
わざとその場で一回転し、遠心力を加え渾身(こんしん)の一撃を腹部へと叩き込む。
「これが……僕とあなたの根本的な差です」
そのまま米谷亜弥香は吹き飛び、背中から床に着く。
「そこまでっ！　……直弥の勝ちだ」
山崎陸の少し落胆したような声で勝敗が告げられる。
その勝敗が告げられた次の瞬間、急に体全身の力が抜けたようになる。
極度の緊張状態から急に安堵し、脱力してしまう状況と酷似したものだ。
既に意識レベルではどう仕様も無い状況にまでなっている。
さすがに少々遊びすぎましたか……。
ドクン
その一回の発作だけで体に残っていた残りの力も全て抜けてしまう。

「少し……疲れました」
誰に言うのでなくその言葉が自然に漏れ、前のめりに倒れていった。

## 13話　パチンコ玉の少女

徐々に意識と感覚が戻り始め、光が眼球に入り込んできて眩しい。
「うぅ……」
「起きたか、直樹」
その陸の一言で完全に目覚める。
記憶は少し混同しているが、今さっきまで直弥と交代していたのは、はっきりと憶えている。
場所が食堂から変わっていなかったため記憶が戻ってくるのも思ったより早い。
「みんな大丈夫だったか？」
「ん？　なんて言ったんだ？」
俺はちゃんと話しているつもりだが、発音がちゃんとできておず陸に意味が伝わっていないらしい。さっきから、口だけでなく体全身にうまく力が入らない。
これだけで直弥が無理な動きをしたということがだいたい分かる。
精神自体は変わったとしてもこの肉体自身は変わらない。
そのため直弥が受けたダメージでも交代すれば俺がそのダメージ分の負担を受けるし、その逆もある。
そもそもこの肉体は俺のものでうたれ弱いものだ。
「みんなは大丈夫だったのか？」
もう一度俺が言うと今度は聞き取れたのか陸は苦虫を噛んだような顔をして、
「俺達は大丈夫だったが、米谷がな……」
そう言いながら陸は米谷さんのいる方見る。
床に座り込み、立つのに力が入らない様子だ。俺もまだ完全に体に力が入らないが、立ち上がりそちら側に行く。

「米谷さん、ごめん」
急に声がかかったためか、俺が話しかけたからなのか、驚いたようにこちら側を向く。
「秋陽君か……。もう立てるのか？」
自分のほうが重症のはずなのに何事もなかったかのようにそう問いかけてくる。
「本当にごめん」
そう言うと米谷さんは俺が何を言っているのか分からないという顔を一瞬してから
「別にいいさ。君達の出した条件に乗ったのは私だ。それに君の意思でないのだから君が謝る必要はないよ」
そう言い終わると今度は陸の方を向き
「予想外の負けだったが条件は条件だ。私も君達の仲間になるよ」
「いいのか？　お前を倒したのは直弥だ。断る権利はあるぞ？」
陸がそう問いかけると、米谷さんは「ははは」と笑いながら
「いいんだよ。君達と居ると退屈しなさそうだからね。今日の放課後からグラウンドに顔を出すよ」
そう言って米谷さんは人ごみの中に消えた。
米谷さんは朝食を摂ってない気がしたがなんのために食堂に来たんだろう。
なにはともあれ俺達は朝食を摂ることにする。
途中意識が直弥と交代したなどで忙しかったが、まだいつもの俺たちと思うと早い時間だ。
「今日は土曜日だな」
椅子に全員が座り陸が意味ありげに発した第一声はそれだった。
「ん？　それがどうかしたのか？」
急に曜日のことを話し始めた陸に和弥が質問する。
「つまり、今日は午前で授業が終わるということだ。ということは午後は俺たちは練習し放題だ！」
陸は爽やかな笑顔でそういった。

その一言を聞いた瞬間、心なしか和弥の表情が変わったように感じる。
いや陸の様子をみると俺も似たような顔をしたのかもしれない。
「なんだよその顔は」
「だってよ、午後からずっとってのは逆に次の日からやる気が無くなるぜ？」
「……たしかに、事を急いで強制させるのは士気の低下につながるぞ」
彩都まで陸に突っ込みを入れる。二人の意見はもっともで陸の意見の根本を突いている。
しかし彩都はメンバーではないのだから反論をしなくてもいいものを、いちいち律儀な奴だ。
「そのへんなら大丈夫だ、問題ないから」
「「問題大ありだろ」」
自身に満ちた様子で言う陸に対して俺と和弥は同時にツッコミを入れる。
「おいおい本気になるなよ。今日は午後からずっとって言う代わりに、明日は自主練で参加も自由って言うことなら問題ないだろ？」
そう陸が少しおちゃらけたように本来考えていたことを言う。
と言うよりその考えだと土曜の午後が空いてなければ日曜は強制的に一日中練習だったというわけか……。
「土曜の午後が休みでよかった」
俺はぼそりとつぶやいた。和弥もそれにこっそりと「俺もだ」って返してくる。二人してニヤリと笑った。
特に食堂ですることもなくなったので、そのまま俺たちは教室へ向かおうとする。
「そこの四人、止まりなさい」
知り合いの声が後ろから聞こえたが、俺は仕事のじゃまをしてはいけないと思い、あえて後ろを振り向かずそのまま教室へ向かう。
他の三人も同じように気にせず教室に向かっている。

「止まりなさいって言ってるでしょうが」
その言葉と共にパチンコ玉が散弾のように飛んでくる。
ヒュン――
次の瞬間、彩都はさも当たり前のように試験管爆弾を投げパチンコ玉を撃ち落とし、陸はアクロバティックな動きでパチンコ玉を避ける。俺は和弥の後ろにさっと身を隠し、和弥は飛んでくるそれをガードして受けきる。おかげで俺は一発も当たってない。
「和弥、大丈夫か？」
彩都と陸は自分に攻撃が当たらないようにしたが、和弥はパチンコ玉が何発か直撃している。
いくら頑丈な和弥だとしてもあの速度で金属の弾が何発も直撃すればダメージがあるだろう。
「……僕か陸に言えば直樹を連れて避けれた。……それで怪我をしても自業自得だぞ」
「はっ、この程度痛くもねぇよ。そもそも使えるときに使っとかなきゃ俺の筋肉に意味がなくなるだろうが」
その言葉に俺はもう一度二人の凄さを実感するのとともに、自分の無力さをもう一度思い知った。
「……で、次期風紀委員長様が俺たちに何のようだ？」
陸がパチンコ玉が飛んできた方を振り返る。
「それは嫌味のつもりかしら。山崎」
陸に次期風紀委員長と言われた女子生徒、小村沙希が答える。
「そもそも秋陽、あなたあたしの声が聞こえていたわよね。なんで止まらなかったの？」
そうあからさまに不機嫌そうな顔をして俺に訊ねてくる。
ここは嘘を付くべきなのかもしれないが、生憎俺の頭はそこまでいい嘘が浮かばない。
……ここは信じてもらえないかもしれないが、正直に言うしか無いのだろう。
「他の奴を注意しようとしていると思って仕事のじゃまをしちゃ悪

いと思ったんだよ」
「あたしが止める四人組なんて貴方達しかいないじゃない……」
正直に答えたというのに呆れられる。この女はキレるか呆れるしか知らないのだろうか。
「そんなことより秋陽。あたしの用件はあなたにあるの」
「ん？」
その言葉に俺は少し疑問を覚える。いつもは俺や俺達に非があるかもしれないが、今日はまだ何もしていないはずだ。
俺が考えていたことが顔に出ていたのか沙希は、
「それは……」
そう言いながら沙希はポケットに手を入れてパチンコ玉を取り出す。
ヤバッ！
「あんたが一番解ってるでしょうが！！」
予想通り飛んできたパチンコ玉。俺はそれを誰もいない方向に向かって飛び込んで避ける。
予想は出来ていたためそれに当たることはなかったが、飛び込んで避けることが精一杯だったため今の俺は地面にうつぶせで寝ている。ピンチということに変わりはない。
そこに沙希はもう一度パチンコ玉を投げてこようとする。
ヤバい、俺死ぬかも……。
俺がその状況と異様な殺気に死すらも覚悟して目をつぶる。
みんな、さよなら……君らといた日々は決して忘れることのない素晴らし――
「ストップ、そこまでだ」
既に沙希は投げるモージョンに入っていたようだったが間に陸が入ってきたため投げるのをやめる。
「どいてもらえませんか、山崎」
殺気だったような声でそういうが陸は一歩も引く様子はない。俺はその隙にさっと体制を立て直した。

「いつもならたしかに少しは俺達に非はあるかもしれない。だが今日にいたっては何も騒ぎは起こしていない。俺達には非はないぞ」
たしかさっきまで米谷さんを引き入れようとバトルを提案したのは陸だったような気がしたが、今ここで言うと話がややこしくなるため俺は気にせず黙っておくことにする。
「何もしてないなんてよく言えたものね。さっき米谷さんの様子がおかしかったら聞いてみたら、秋陽。あなたにやられたと言っていたわ」
たしかに傍から見れば俺が米谷さんを倒したように見えたかもしれないが、米谷さんは自分が相手したのが直弥だということを知っている。その上それを気にした様子もなかった。
それを踏まえると沙希の聞き間違いか、米谷さんの言い間違いだろう。
俺がそこにいたるまでの理由を話そうとすると、陸がそれを邪魔するかのように話し始める。
「ちゃんとした理由は存在するが、今のお前は何を言ったってちゃんと聞きやしないだろう。だから俺達のバトル方式に従ってここで白黒をはっきり着けたい所だが……今はやめておいたほうがいいな」
「何でよ、そこまで言っといて」
陸の意見に対し沙希があからさまに不機嫌な口調で訊く。
「もうすぐ予鈴がなるからだ」
キーンコーンカーンコーン
その言葉と同時に予鈴が食堂に鳴り響く。
「仕方ないか……」
沙希もさすがに立場上遅刻するわけにもいかないのか、食堂から出て行く。
「じゃあ、俺達も急ぐか」
その言葉と共に陸、和弥、俺、彩都の順に食堂から教室に向かって走りだす。
結局、時計が壊れているため早く起きるという俺の努力はこうし

て水の泡となり消えていってしまった。

## １４話　睡魔と遊び

二時間目の授業が終わり俺は大きなあくびをする。科目は日本史で苦手というわけではなくむしろ得意な方の教科だ。
しかし、教師の声がちょうど良い眠りを誘うような声ですごい催眠作用があるのだ。
周りを見ると何人もあくびをしていて眠くなっているのはやはり俺だけでないようだ。
彩都、田川さんはちゃんと起きているが、陸、和弥に関しては睡魔に身を任せ眠りについている。
そして米谷さんに関しては教室内にいない。学力は問題ないとしても、単位は大丈夫なのだろうか。
かく言う俺は学力すらも危ない橋を渡っているため眠気が次の授業に響くといけないので顔を洗ってくることにする。
顔を洗うために手洗い場へ行くと珍しい先客、鳳さんがいた。
「珍しいですか？」
珍しかったのでその感想が口から漏れてしまっていたのか、鳳さんは顔を白いハンカチで拭きながら聞いてくる。
「いや、鳳さんはちゃんと睡眠時間をとっていそうだから、どうしたのかなぁって思って……」
これが俺の本心からの感想だ。実際これまで鳳さんが日本史の後に眠そうにしていたことは一回も見たことがない。
教師の声で睡魔に襲われたという事はなさそうだ。
「昨日は遅くまで勉強をしていたものですから。秋陽さんも遅くまで勉強をしていたのですか？」
そうクスッと少しいたずらっぽい笑みを浮かべながら鳳さんは聞いてくる。

「え……あ、まぁそんなとこ……かな？」
質問に答えたというのになぜか答えが疑問形となってしまう。
慣れてもいないのに嘘を付くもんじゃないな……。
「皆さんも遅くまで勉強をしていたのでしょうか？　ほとんどの方が眠そうにしていましたし……」
「そうかもね」
お互い少しの間笑いあう。
「そういえば今朝はまた、騒いでいらっしゃったんですね」
鳳さんは今朝のことを思い出したように俺に聞いてくる。
「あ～、その話か……」
少し予想は出来ていた分驚くことはない。鳳さんは生徒会関係の人なのだから、今朝のことを知っていてもおかしくはない。
それどころか俺達がやっているのは風紀を乱すような行動なのだから、それを知らないわけがない。
「悪いことをやったっていう自覚はあるんだけどさ、陸も別に楽しもうってしてるだけなんだよ。風紀を乱そうだとか、何かが気に食わないだとかそんな理由で動いてるわけじゃないってことを分かって欲しいんだ」
理由（わけ）があっても許されることと許されないことがあるのは自分自身でも解ってる。
だとしても悪意による行動ではない、ということだけは分かって欲しかった。
「大丈夫ですよ。そのことは私は分かっていますから。それに私は生徒会とは関係ありませんから」
あれ？　たしか鳳さんは生徒会の一員だったような……。
「正確にはもう関係がない、だな。鳳君」
急に後方から声がかかったのに驚き俺は後ろを振り向く。振り向いた場所には予想通りというべきか、やはり米谷さんがいた。
第一こんなことが出来るのは米谷さんぐらいだろう。……宿題を盗み見しようとする和弥以外には。

そんなどうでもいいことを考えるより、今は米谷さんの言った言葉の意味を訊くほうがいいだろう。
「もう関係ないって、どういう事ですか？」
俺、というか俺の周りにはそちらの事はあまり分からないため、詳しそうな人がいる今ここで聞いておくべきだろう。
「ん？　秋陽君は知らないのか。この学校では生徒会は六月に交代するのだよ。去年もそうだったはずだが……覚えていないのか？」
そういう類の話は自分にはほとんど関係ないと思い、あまり聞いていないためおぼろげにしか覚えていないがたしかそんな話があったような気がする。
「で、その交代の日が昨日だったって言うことですか？」
「まぁそういう事だよ。説明はここまでいいかね？　質問が何も無いなら私は教室に戻らせてもらうよ」
そう言って質問がないことを確認してから米谷さんは教室へと戻って行く。
とりあえず一番わかったのは、米谷さんが神出鬼没な人物だということだろうか。
「では、私の教室に戻ります。秋陽さんも早めに戻ったほうがいいですよ」
そう言って鳳さんも教室へ戻って行く。
たしかに早めに戻らないと時間がないな……。俺も手早く顔を洗い教室に急ぎ足で戻っていった。

「あれを俺たちの遊びにしないか？」
食堂で昼食をとっている俺達に対しての陸の第一声はそれだった。
「あれってなんだよ？」
そんな陸に対して質問をするのは、和弥だ。
「俺達がいつもやっているバトルだよ。あれのルールを元にして少しアレンジを加えれば面白くなりそうだろ？」
異論はないがもともと被害を少なくするためのルールを遊びの一

つに追加してもいいのだろうか？　まぁ、発案者が陸ということは異論は認めないのだろう。
「面白そうじゃないか！？」
和弥は目を輝かせて俺達に訴えてくる。
「駄目だ」
俺は冷たく言ってやった。
「ひでえな！　それとも何だ、俺の存在がダメだって言うのかよ！？」
「……そう思うなら消えてみればいいだろう」
「お、それは名案だな。じゃあちょっと消えてくる」
「……じゃあな」
「達者で暮せよ」
和弥はそのまま食堂を出て行く。
もう既にこの短時間で被害者が一人出ている。というか和弥が単純すぎるのが問題なんだろうが。
和弥の行動や理解力や言動を単純という一言で片付けられるかどうかは疑問だが。
「……参加者は何人だ？」
一番参加する気があるとも言える和弥を置いて話が進む。
「その話乗ったあぁぁぁ！」
そこに、いきなり和弥が大声を出して食堂に入ってくる。思いっきり周りに迷惑になっていた。
「参加者はベースボールファイターズに入ってる奴と彩都で今は六人」
「はい、無視されたあぁぁ！」
和弥あんまり叫ぶのはやめような。心のなかでそう語りかける。
「最低でも後三人は増える」
「はっ！　腹がなるぜぃ！」
多分腕がなると言いたかったのだろう、和弥は何故か腹がなるとゴキッ腕の骨を鳴らしている。

「……お前はそれだけ食べても腹が減っているのか？」
そう言われている和弥はもう既にカツと天ぷら定食を食べ終えている。
「和弥……腕がなるの間違いじゃないのか？」
陸がそう、ツッコミを入れると、
「腕がなるぜ」
慌てる様子もなく言い直した！？
ここまでくると逆に見事に思える。すごいよ和弥……。
「あとで一応ルールを書いたメールを全員に送っておくが、ここでも説明はしておくな。バトル中のルールは今までと変わりはない。手足以外を床に着いたら負けで、女子のみ武器の補充がバトル中に出来る。方式はリーグ制の点数式。最初は一人持ち点十で、バトル後に負けた奴は勝った奴に一ポイントを渡すことになる。もちろん持ち点の多い奴から一位だ。それとバトルの申し入れは断ることは出来ない。コイツが適応されるのは午前七時から午後七時までの十二時間。その時間外のバトルはルールは適応されてもポイントの変動は無しとする。なにか質問はあるか？」
まだ説明されていないところがあるため、俺は一応手を上げてから質問をする。
「バトルを始める前はどうすればいいんだ？」
その質問を待っていたとばかりに陸は説明を始める。
「バトルの審判はこれまで通り俺がする。バトルをする相手が見つかったらどちらかがバトルをする奴と場所をメールで俺に送ってくれ。それを俺が他のメンバー全員に一斉送信する。それから五分後にバトルを開始する。その間にバトルをするのは禁止だ。見たい奴は見に来ても良い。結果は次のバトルを始める目安としてメールで全員に送る」
「……それ以外の奴が混ざってきたらどうするんだ？」
彩都も俺と同じように手を上げてから質問をする。
普通は他の奴の乱入などの事は考えなくてもいいのだが、この学

校ではそれを考えなくてはならない。
「参加者以外とのバトルは拒否権もある。それにバトルで勝ったとしてもポイントはプラスされない。しかしそれだけじゃ少しばかり辛味が足りないだろ。だから負けた場合は一ポイントマイナスされると言うルールだけは適応される」
あくまでこの学園内でのバトルにはルールが適応されるというわけか……。
「異論はないか」
「一切ねぇな。むしろかかってこいやぁ」「……あったとしても受け付けないのだろ」
陸の問い掛けに対し、和弥と彩都がそれぞれの言葉で肯定の意味を伝える。
そして俺も首を立てに振って肯定の意思を伝える。
「よし、それじゃあ今から学園バトル王者決定戦。略してＧＢＯ決定戦を始める！！」
その陸の言葉は廊下、教室で反響し学園全体に響き渡った。

## 15話　七不思議の一つ

昼食を済まし少し自由時間を過ごしてから俺達は練習を始めることになっている。

しかし昨日の練習のことを考えると陸は今日も準備をした後、すぐに練習を始めるだろう。――となると自由時間と行っても体を動かして置いたほうが賢い選択だろう。そう思い俺はこの時間に体を動かしておくことにする。

しかし体を動かすと言っても何をすればいいんだ……？

部活に入っているわけでもない俺は普段体を動かすのは体育の授業か、陸たちと遊んでいる時ぐらいだ。何をどうすればいいかなんて言う専門的なことは解らない。

まあ、走っとけば間違いはないか……。

結局俺は、走っておくという結論にいたりニ、三周ほど走るためにグラウンドに出ることにする。こうしとけば遅れることもなく一石二鳥だしちょうどいいか。

そうして俺がグラウンドに出るために廊下を歩いていると、前方から赤髪をツインテールでまとめて縛っている小柄な女子生徒が一人走ってくる。

「そ、そこの人、どいて～！」

急にそんなことを言われて避けれるほどの反射神経を俺は持ち合わせているわけもなく、おもいっきり正面からぶつかる形となる。しかし、それで俺が倒れたりすることもなく、むしろぶつかってきた女子生徒のほうが後ろに倒れ被害が大きい。

「……大丈夫か？　こいつ」

独り言のように自然と口から呆れたような、驚いたような言葉が漏れる。

ぶつかってきたのは相手だが、さすがに自分にここまで被害がないと相手の心配をする。
しばらく心配して顔を覗き込んでいるとさっきは気づかなかったが俺はこの女子生徒のことを知っていることに気付く。
女子生徒の名前は尾上綾（おがみあや）。校内の至ることにトラップを仕掛け周り、かかった奴の反応を見て楽しむと言う典型的な愉快犯のような生徒で有名だ。
それだけ校内にトラップを仕掛けても退学にならないという彼女のある種の伝説はこの学園の七不思議の一つだ。
「いたたたた……」
そして俺がそんなことを思い出しているうちに彼女は起きたらしい。
「あ、すいません。大丈夫でしたか？」
「え？　あ、大丈夫だよ」
自分が心配していたよりも相手の反応は普通でこちらの方が面くらってしまう。
それにこの状況を見るだけでは被害者は彼女なのではないかと思えるため傍からみるとおかしな構図だ。
「こっちにもいないようです。……おかしいですね、どこへ行ったのでしょう？」
そのような言葉が遠くの方から聞こえてくる。
その声の主が誰かを探しているような様子と、目の前の彼女が顔色を変えていることからなんとなくの状況は察することが出来る。
「そこら辺に隠れといて。俺が適当にごまかしておくから」
俺自身もこのような状況に慣れてしまっているせいか、はたまた相手が相手だからかどうしても追われている方を応援してしまいたくなる。
そもそも俺自身がぶつかってしまった事に対しての負い目もあるため、尾上さんの手助けをすることに決める。
そしてしばらくして足音が近くなるとともに、その人物の姿が見

えてくる。それは予想通り沙希と他ニ名の風紀委員だ。
何かを探している様子からやはり尾上さんは風紀委員に追われているのだろう。
「秋陽、ここにツインテールの小柄な女子生徒がいなかった？」
沙希は俺を見つけるなりそう質問をしてくる。
俺の左側の廊下に尾上さんは隠れている。そのためそっちに沙希達を行かすわけにはいかない。
そのため俺は右手側にある階段のほうを指さし、そっちの方という意思を伝える。
それが嘘だと気づいてか気づかずか礼も言わずに上の階に行ってしまう。
次の階が最上階のためこの情報が嘘だということは案外簡単にバレてしまうだろう。
しかしそれでもこの学園の校舎は広いため数十分の時間稼ぎになる上それ程の時間があれば尾上さんは逃げきることが出来るだろう。
やがて足音が小さくなりそれが完全に聞こえなくなると尾上さんが隠れていた場所から出てくる。
「助けてくれてありがとう。えっと……」
「俺の名前は秋陽直樹。よろしく」
尾上さんが俺の名前を知らないことで思い出すことができたが、本来ならば俺も尾上さんの名前を知らないはずだということに気付く。
「改めてありがとう。直樹くん。私の名前は尾上綾。最初に言っておくけどもし私を呼ぶときは苗字じゃなくて名前で読んでね」
俺にはその感覚は特にないが苗字か名前のどちらかで呼んで欲しい奴もいる。尾上さん……じゃなくて綾さんもその一人なんだろう。
「じゃあ、あんまりここに居続けてると上から戻ってきちゃうかもしれないからもう行くね」
そう言いながら彼女は、俺とぶつかりさえしなければ本来行っていただろう方向へと走っていく。

途中、彼女が俺に向かって手を振ったところで俺も手を振り返す。
腕時計を見ると、そろそろ集まる時間になってきている。
グラウンドに行かなきゃな……。そんなことを思いながら、俺は彼女の向かった方向と反対へ歩き出した。

# 16話　陸と上野

結局、それだけでフリータイムは終わってしまい、俺は準備体操もできないままグラウンドへ向かうこととなる。
しかし俺がグラウンドに着いたのはまだ早めだったらしく、陸と和弥の二人しか居なかった。
二人して来ていたのはもっと前だったらしく、練習道具を出し終え二人とも準備体操をしている。
「おっ、来たか直樹」
俺が来たことに気づいた和弥が体操をしながら振り向き、話しかけてくる。
「直樹、今日もいきなりバッティングから始めるってよ。体、ちゃんとほぐしとけよ」
そう言われても、何をすればいいかなんてことはわからない。
だがとりあえず、アキレス腱を伸ばしておけば問題はないだろう。
それから五分ほどが経ち、田川さん、上野の順にグラウンドに出てきて最後の一人である米谷さんがやってくる。
「む、私が最後か……。少し遅かったかい？」
「いや、俺らが早かっただけだ。遅れちゃいない」
米谷さんの質問に対し陸は、自分の腕時計を見ながら答える。
「陸、今日はどんな練習をやるんだ？」
次に質問をしたのは上野だ。俺が和弥からバッティングと言われたときは上野は居なかった。
その上、俺も詳しくは知らず、バッティングとしか聞いていない。
バッティングはバッティングでもやり方が違うかもしれない。
「いや、今日も昨日と同じでバッティングだ。ただ、今日はバッターは交代制でやる。ひとり持ち玉は二十球な」

「俺が打つときはどうするんだ？」
説明を終えた陸に質問を投げかけたのは、またもや上野だ。
確かに俺達のチームには上野以外のピッチャーは居ないのだが、陸はそこはどうするつもりなのだろうか？
「上野がバッターをやるときに限っては俺がピッチャーを受け持つ」
それなら問題ないだろ？　と、陸はもう一度念を押すように行ってくる。
問題の有無以前にピッチャーをやることが出来るのはこの中では陸しか居ないと思うのだが……と損なツッコミはせずに持ち場に向かう。
最初のバッターは陸から始まる。守備の方は田川さんがファースト、和弥がレフト、米谷さんがショートで、俺がセンターを守ることになる。そしてピッチャーは、もちろん上野だ。
マウンドから上野は一球目を投げる。
カァァン
爽快な金属バットの音がなり、痛烈なゴロが三遊間に飛ぶ。
「和弥、そっち行ったぞ」
ショートは米谷さんが守ってはいるが、さすがにあのスピードでは捕れないと思い和弥に声をかける。
「そう簡単に抜かせやしないさ」
そう言うと共に米谷さんは俺の予想に反しボールを捕球し、ファーストの田川さんに向かって投げる。
その球のスピードは速く、田川さんは恐怖で目をつぶってしまっているためボールをとれる可能性なんて皆無に等しい。俺がため息をつこうとすると、米谷さんの投げた球は操られているかのように田川さんのグローブの中に収まった。
昨日、陸が行ったプレイとほぼ同じだ。
「くそっ、抜けなかったか」
陸は悔しそうな顔をしながら独り言のように言う。
カァキィィン

「よっしゃぁ」
ラストのボールを完全に捉え、そのボールをレフトの前まで運ぶ。
陸のバッティングは長打は少ないものの、理想的なバッティングフォームのそれだ。
丁寧にミートしてヒット性の当たりを打っている。
正直米谷さんがショートじゃなかったら前に飛んだ球は全てヒットだっただろう。
二十球中の陸の成績は、十九球を前に飛ばしそのうちヒットになったのは八球だ。
しかし米谷さんがショートだったことを思えば好成績の方であり、それが違えば十五球以上は固かっただろう。
「じゃあ次は上野がバッターな。ピッチャーは俺がやるが、それ以外は適当に着いてくれ」
その一言で俺たちは少しポジションを変える。
田川さんがセンターに移動し、俺はファースト、和弥はキャッチャーに着いた。米谷さんはそのままショートだ。
このようなポジションに変えた理由は……というよりさっきのポジションが少しおかしかったのだ。
このようなバッティング練習にはだいたいキャッチャーが着くか、ネットを後ろに用意しておくものだが陸の場合はどちらも着けなかった。
着けなかったというよりかは正しくは着ける必要がなかったのだが、それは一部のみ出来ることであって俺たちにはもちろん出来るはずがない。
上野がバッターボックスに入り感覚を確かめながらバットを構える。
それを見た陸も、マウンドの感覚を確かめるように足で地面をならしてから、セットに入る。
綺麗なフォームから一球目が投げられる。
ブルン

外角低めのストレートが投げられる。
勝手に拝借してきたスピードガンには　１２５？／秒　と出ている。
キャッチボールも何もなしに投げたというのに、素人が投げた球としては速すぎると言ってもいいほどの球速だ。
その後も聞こえてくる音はキャッチャーミットにボールが入る音とバットにボールが当たる音が五分五分といったところだ。
そして二十球目
バットにボールは当たりはするがピッチャーの正面のゴロになる。
「全然飛ばねーな。やっぱ陸みたいにうまくは行かねーか」
そう言いながら上野はバットを置き、グラブをはめ、陸からボールを受け取る。
「では、次は私が行かせてもらおう」
ショートの方から落ち着いた米谷さんの声が聞こえてきた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9866q/

夏、僕ら、青春。

2011年8月8日03時24分発行